
Si je tombe dans l'amour avec vous

篠宮 かある

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Si je tombe dans l'amour avec vous

【Zコード】

N9895X

【作者名】

篠宮 かおる

【あらすじ】

他サイトに別名で掲載していた作品を、題名をフランス語にして、加筆修正をした物です。

夫は社長、妻は一般社員。
二人の関係は崩壊寸前。

「お願い、私を愛しててなら別れて・・・」

不器用な夫婦のラブストーリー。

、 0 動かした歯車。 (前輪)

ねじり越し作業中です。

、〇 動き出した歯車。

↙愛してる↙

そんな言葉は、私達夫婦の間には、最初から存在していない。

左薬指でさりげなく輝く指輪は、物言わぬ冷たい鎖。
その鎖に刻みこまれている言葉は、想いの籠つていない愛の言葉。

- - L - amour qui est destin? - -

真実味のない、当てつけの様な言葉。

日本語に訳せば↗運命の恋↖。

フランス語にしてあるのは、私に対する嫌味。

私、菜々宮^{ななみや}吉乃^{よしの}、26歳は、結婚して三年目の、ビルにでもいる
そうな普通の一般社員。

それに引き換え私の戸籍上の夫は、今、最も世間で話題の中心になっている若手実力派の社長。

見た目も然ることながら、言動から視線まで、全てが最高品質で、
文句のつけようのない所がまた逆に腹立たしい所。

鋭い眼は、常に私以外を見つめていて、微かに掠れ、良く響く甘い声は、ベットの中で聞けば、程よい甘さを含む媚薬にも匹敵し、魅了される。

そして、ガツシリしている割には、決して太っていない鍛え上げられた身体。

それで35歳となれば、玉の輿を狙っている女性社員にとつては、最高の獲物である事は間違いない。

さやあさやあと、やけに煩く、甲高い媚びた奇声をあげる先輩達を尻目に、私は『えられた仕事を全うしよう』と、美女の集団に囮まれている夫を見て見ぬふりをし、その横を堂々と通り過ぎた。

家では夫婦でも、一歩でも家から出れば、その瞬間から私達は他人になる。

(まあ、家でも他人だけどね・・・?)

そんな事を思いながら、歩いていると、声を掛けられた。

「あら、菜々富さん。アナタいつからそこにいたの?」
全然気付かなかつたわ。

と、勝ち誇った笑みを浮かべ、小馬鹿にされ、蔑まれるけど、もうそんな程度の幼稚な虐めでは何とも思わないし、感じない。
逆に、そんな事しか出来ない人を憐れみたくもなる。

(どうがいいのよ、あの人の。)

でも、言い返し、反論するのも面倒だし、億劫。
なら。

「すみません・・・」

小さく、怯えた声で謝り、頭を下げ、下に俯いて走り抜ける。
それが愉快だったのか、女性の甲高い声が聞こえた。

「アレでも同じ女かしら。見た？あの子、今日は化粧すらしてなかつたわ。」

大袈裟に声をあげ、私をバカにし、優越感に浸っていた女性は、自分の隣に立っていた男性に甘えるように凭れ掛った。

その男性は、私が勤務している会社の現社長であり、戸籍上の私の夫である、綾橋智さん、35歳。

でも、胸は痛まない。

そんな光景に胸を痛めていた可愛い私は、結婚して2ヶ月目ににして死んでしまった。

今では涙も出なければ、溜息さえ漏れない。

「吉乃、大丈夫か？顔色悪いぞ？」

出勤して早々、疲れ果てて頭を抱えていた私を気遣い、声をか掛けてくれたのは、同期で入社した営業部のエース・長瀬類、28歳。

同期の誼で、私が営業部から総務部に異動した今でも、こうして仲良くしてくれている。

（いけない、今は会社なのに・・・。）

気付かれないように、そつと自然に笑顔を浮かべる。

「類は今日も、相変わらず朝から元気ね・・・？」

「まあ、営業は体が資本だからな。それより、本当に大丈夫か？お前また痩せたんじゃないのか？」

節だつた指が、私の頬を滑つていく感覚が懐かしくて、不覚にも泣きそうになってしまった。

お互いが大切過ぎて、親友以上になれなかつた私達。後悔していないと言えば嘘になるけど、今の私は、昔の弱い私じやない。

彼にも、彼の人生がある。

大きな手の平に手を絡めるように手を重ね、私はもう一度笑顔を浮かべた。

「大丈夫よ？私には愛する旦那様がいるから。類は知つてるでしょ？」

嘘。

愛なんかない。

だけど、類は優しいから、だから嘘を吐く。

あの人に対して抱いている感情があるとするのならば、それは深い深い諦めの様なもの。

愛しさもなければ、悲しさや憎とも感じない。

『無関心』と言つ言葉が近いだろうか。

密やかな逢瀬を終えた私は、パソコンに向かい、ひたすらキーボードを叩くように弾く。

緩くウェーブが掛かっている柔らかめの長い髪が、他人の視線か

ら私の表情を覆う様に隠す。

さつき、類に「痩せたんじゃないか?」と、指摘された時は驚いて、一瞬、呼吸をするのを忘れてしまう位、驚いた。

確かに最近、私は最近痩せた。

でも、バレるとは思つてもなかつた。

(あの人は気付かないのにね・・・)

近しい人より、昔の想い人が私の変調に敏感なんて。

私が痩せる理由は拒食症気味による少食で、その拒食症気味の原因は、環境の変化によるストレスと、心因性のものだと病院で判断された。

私を担当してくれた先生は、そのストレスの原因を取り除かなければ、後々、私が悲しむ事になると、はつきり断言した。

そして最後に、精神科の先生も紹介してくれて、くれぐれも興奮しないようにと、注意した。

ふと、顔を上げ、何気なく辺りを見回した私は、見たくもない光景を目にしてしまい、無意識の内に唇から血が出るほど、強く噛み締めていた。

(ああ、やっぱり。結婚なんてしなければよかつた。)

私が偶然にも見てしまったモノは、戸籍上の夫が、綺麗で、魅力的な女性とキスしている所だつた。

結婚して、今年の10月で三年。

それは結婚した時から、僅かに軋み、隙間だらけだつた私達夫婦の擦れ違う歪んだ関係が、いよいよ変化する刻を悟り、今にも大きく動きだそうとする瞬間でもあつた。

、1 離脱と発症（前書き）

この話から色々と手直しが入ります。

、1 魂裂と発症

涙は三年前に枯れ果てたのだと、ずっと想いこんできた。
だけどそれは私の単なる思い込みだったらしい。

両頬に静かに伝わる、熱くも冷たい心の雫は、止まる事を忘れた
かのようにずっと流れ続けている。

(何を泣く必要があるの・・・。)

寝室は結婚して三ヶ月目に別々となり、夫婦として身体を重ね合
わせた記憶も一度としてない。

なのに私は今、それを悔しく、惨めに感じている。

昨日、あの後、私は正午までに仕事を何とか予定通りにこなし、
早退し、病院を受診した。

その病院は、昨年の秋から定期的に受診している所で、受診した
のは精神内科。

私が診察室に入った瞬間、私を担当してくれている先生は、厳し
い声で「やめなさい」と言葉を発した。

私には、先生がどうしてそんな事を言うのか判らなかつた。

先生はそんな私の心理状況もお見通しだつたのか、静に囁くよう
に言葉を発した。

最近、泣いた記憶は?と。

私は首を横に振り、覚えてないと答えを返した。

先生は痛ましげな表情を浮かべながらも、最近あつた事を事細か

く聞いてきた。

「これも治療の一環だからと、辛くとも話してくれるね、と、言わ
れれば、私は望まれるままに話した。」

そして、ついさっき職場で見たことも、ありのまま淡々と話せば、
先生は大きな溜息を吐いて、それが原因か、と、本当に小さく咳い
て、私に聞いてきた。

「田中さんは別れられない？」

別れられなければ、近い内に確実に倒れると言われた私は、それ
でも別れられないと、無意識に答えていた。

一夜明け、田中覚めた今、その理由が解った気がした。

いくら口先で愛がないと言っていたとしても、私はいつか。

（ああ、私って何処まで救いようがないの・・・。）

そう。

心の中ではいつも、こいつが、きっと、と、想い、願っていたのか
も知れない。

でも、それももうそろそろ限界。

心が、身体が、そして何より私自身が、声無き悲鳴を上げ、今に
も狂つてしまいそうだった。

ベットから降り、姿鏡の前に立つ。

鏡の中には、女性らしさの一欠片もない、貧相な身体つきの私が
いた。

「吉乃、貴女、どうしたいの・・・？」

鏡の中の私は弱々しく、誰だって抱きたくない、鶏ガラより粗末な女にしか見えなかつた。

鏡の中にはる私自身に声をかけても、答えが返つてくる訳でもないのに、それでも私は答えが欲しい為、自問自答を繰り返す。

（とりあえず、食事作らなきゃね・・・。）

そう思いながら、着替える。

その着替えている時でさえ、私の頭の中は、暗い思いと考えが常に支配している。

今的生活を捨てるのは簡単。

でも、その後の私の生活は？

不況な世の中のこのご時世、再就職なんて簡単に出来ない。

離婚だって、離婚後の住居や仕事、住み易い環境を整えてからの方が良いに決まっている。

大きめなトレーナーをクローゼットから出し、ジーンズと合わせれば、身体の線は簡単に隠せる。

長い髪は適当にアッパーし、バレッタで留める。

そのバレッタは、結婚が決まったお祝に、と、類が、特別にオーダーメイドしてまで、注文買い取りし、贈ってくれたモノで、一番気に入ってるモノ。

最後に、指輪をつけようと、ジュエリー ボックスに手を伸ばし掛け、やめる。

(心もないのに、わざわざ自分から鎌をつけて庇つあるのよ・・・)
-。)

自分の愚かさと滑稽さに吐き気がする。

そんな気分をなんとか押し殺し、ガチャリと、寝室からリビングへと通じる扉を開くと、そこにはもう笑うしかない光景が、今や遅しと、私を待ち受けていた。

「お邪魔したみたいですね。どうぞ、私の事はお気になさらないで下さい。」

如何にもこれからといつ場面に出くわしてしまった私は、喚く事より、微笑を浮かべ、黙認する事を選んだ。

指輪をしていないだけで、私はひどく精神的に楽だつた。

(最初から、こいつしていれば良かつたんだわ。)

現に、名前だけの偽りの夫に睨まれてゐる今も、全然怖くもなければ、悲しくて辛くもない。

自分でも気付かない内に、自然と笑みが浮かんでくる。

「吉乃・・・?」

その笑顔の意味が解らなかつたのか、名前だけの夫・智が、苛立つた表情から困惑した表情で、私を見つめ、自分の身体にしな垂れ掛つていた妖艶な美女を引き剥がし、私と正面から向き合つた。
そして、ゆっくりと伸ばされた手を、私は大きな音を立て、打ち払つていた。

「私に触らないで！！」

叫んだ瞬間、眩暈が私を襲った。

(・・・っ、こんな時に・・・。)

だけど私はその襲ってきた突然の眩暈を、『氣力と興奮から無視し、近くにあつたガラスのフォトフレームを掴み、智に投げつけた。

投げつけたフォトフレームには、私と智のウェディング姿の写真が収まっていた。

粉々に砕け散ったフォトフレームは、私達夫婦の関係の様だった。

最初から解っていた。

私達夫婦の間に、『愛』などと言づ、愚かで、甘い感情がないことなど。

(なのに、なのに・・・。)

結婚して一ヶ月位までは、確かに恋はしていた。
ただし、それは恋に恋にしていただけ。

荒れ狂う心を抑える為、私は自分自身に暗示をかける。

私が恋していたのは、幻で、類だけ。
この人なんて、恋なんかしてない。

(そうよ、恋なんてしてない。)

「ああ、何よ。その丑は。貴方はいつもそつ。私をいつもせりつけ
てバカにして…! 気に食わなかつたのよ・・・。」

貴方の顔が、と、続く筈だつた私の言葉は、無理して抑えつけて
いた強烈な発作により、声にならなかつた。

胸を搔き廻るほどに、辛く、息苦しい発作は、私の身体からの命
がけのSOS。

両膝をリビングの床につけ、右手で身体を支え、左手で胸元を押
さえれる。

(ああ、だからだつたのね。)

決して興奮してはならないと言われ続けた意味が、今、初めて解
つた気がする。

死にたくないのに、死神の甘美な囁きが私を誘い、私はその囁き
に誘われるまま、意識を手放した。

、
1　亜裂と発症（後書き）

一端、区切れます。

、2 キス（前書き）

短いんですけど、更新。

、2 キス

まだ、ダメよ・・・。

まだこちらに来ではダメよ・・・。

私の愛しい - - - 。

生と死の空間で彷徨つっていた私を現実に連れ戻してくれたのは、
どこかやさしく、慈愛に満ちた知らない声と、頬に感じた痛みだつ
た。

その頬の痛みに目を開くと、そこには何故かアノ人達がいた。

(ど、ど、ひして、いるのよーーー)

いたのは、菜々宮の母と姉。

「吉乃・・・?吉乃!良かつた。あなた、智さん、吉乃が目を醒
ましたわ。」

恐怖で凍りついた私の身体を、母は涙で潤んだ瞳を細め、嬉しげ
に微笑んで見せ、私の身体を起こし、ベットも起こし、甲斐甲斐し
く世話を焼いた。

傍から見れば、美しい家族愛に見えるこの光景。

私はその光景を守る為に、固まつた表情筋を動かし、微笑んで見
せた。

「お母さん、私、少し寝過ぎちゃった?」

掠れた小さな声は、母と姉の気に呑せなかつた様だつた。

「吉乃、アンタ憶えてないの？アンタはね、過労で倒れたのよ。智さんが病院に連れてきてくれなかつたら、危なかつたのよ！？」

姉は私の胸元を、ぐつ、と、力を込め驚掴み、揺さぶつた。

「い、痛いよ、翠ねえ。分かつたから放してよ。」

「いつもこいつだ。」

諦めながら、抵抗しつつもそのまま揺さぶられていた私は、逸らした視線の先で、初めて戸籍上の夫と目があつた。

智は何故か酷く憔悴していく、私が自分を見ている事に気付くと、顔を歪め、手を伸ばしてきた。

後から思いだせば、私はこの時初めて、智の顔を見たと思つ。

不安そうに歪められた顔は、確かに私を察じていてくれていた。

静に、ねつとつと絡み合つ視線。

結婚して、恐らく初めて絡み合つた視線。

そしてそれは、私に戸惑いと熱を生じさせた。

「あれ？吉乃、アンタ熱でもあるの？顔が真つ赤よ？」

「ふえつー？」

(も、そんな・・・。)

私は姉の言葉を否定しながら、まるで智の視線から逃げるかのように布団を被つた。

だけど、病院の布団は薄くて頼りない。

私はいつも容易く姉に布団を捲られ、姉を恨んだ。

返して、と、繋がる筈だつた言葉は、あっせつと固まつてしまつた。

(どうして、キスされてるのー?)

すっかり混乱してしまつっていた私は、抵抗す事さえ忘れ、智から与えられた、熱く、性急なキスに溺れ、気がついた時には胸元が肌蹴られ、ベットの上で羞恥に悶えていた。

キスに溺れながらも、それとなく家族の姿を探したけど、家族の姿は既になく、病室には私の乱れた吐息だけが甘く響く。

「ん・・・、やつ・・・。」

思考がついていかない。

首筋に感じた痛みと、ちゅうと、濡れた音で、更に何も考えられなくなつた。

「吉乃、吉乃・・・。」

フロントホックのブレジャーに、大きな手が掛けた時、甘く、乱れた空気を邪魔するかのように、病院に一人の女性が現れた。

「智さん、迎えに来ちゃった。」

艶やかで、自信に満ちた、私とは正反対の魅力的な女性の登場で、私は瞬時に正気に立ち返っていた。

乱された病衣を手早く直し、ベットから降りる。

淫らなこの身体が、堪らなく嫌だった。

「ちょっとトイレに行つてきます。」

「吉乃、戻つてこよ？」

「…………。」

(アナタは何処まで私を苦しめるの……?)

私が返事をしない事に、何かを察知したのか、智は私と目を合せ、念を押すように「行つてこい」と言いながら、肩を軽く叩いた。

病室から出た私は、当てもなくなく院内を歩いた。

(どうして抵抗しなかったの?)

答えなら解つていた。

だけど、考えずにはいられなかつた。

歩きながら考へてゐるのは、つい先程までの事。

キスされた瞬間は驚きで、段々と深くなつていくキスは、女としての本能が働いてしまつたのか、浅ましくも止められなかつた。

抵抗できなかつたのは嬉しかつたから。

（なんだ、嬉しかつたの？私は、あんなに嫌だつたのに・・・、あんなに・・・。）

報われない恋はしないと、あの時に誓つていたといひのよ。

自分で自分が情けなくなつてくれる。

ぱるぱると勝手に溢れてくる涙で、前が見えなくなつてきた私に、神様は私に更なる試練を科そうとしていた。

だからだらうか。

私が気付かない内に智につけられ、首筋に咲いた紅い花は、励ますかのように中々消えなかつた。

泣くだけ泣いて、そのせいで腫れてしまつた瞼。

「うして泣いている間にも、運命の時は静に迫つていた。

泣いている間、無意識の内に歩き回つていたせいか、私に宛がわれた病室までは、随分と距離があつた。

ふらふらと病室まで歩いていた私は、寒氣を覚えて立ち止まつた。と、その時。

「菜々富さん、丁度良かつた。少し良いですか？」

「どうしたんですか？ 加賀見先生。」

私を呼び止めたのは、私の担当医の加賀見先生だった。その加賀見先生に、いつになく真剣な瞳で見つめられ、嫌な予感がした。

「ううじや、ちよつと……。」

案の定、加賀見先生は私の顔を見て、気まずげに顔を歪め、逸らした。

(こや、こやよ……。)

つていけば、嫌な事を告げられる。

頭では分かっているのに、足が勝手に動く。

加賀見先生はまだ若いながらも、名医として有名で、彼の手に掛かれば、どんな患者も明るくなると。

だけどそんな加賀見先生でも、時には残酷な宣言をしなければならない時だつてある。

それがたまたま。

そう、偶然だつただけ。

その残酷な宣告を受ける患者が、私だつたと言つだけ。

加賀見先生に連れて来られた所は、小さな誰もいない部屋だつた。備え付けのソファーに座る様に促され座つた私に、加賀見先生は憐みの籠つた瞳と口調で話し始めた。

「悪かつたね。でも、菜々富さんは家族には知られたくないからね？」

これから話す事は、全部菜々富さんの為だからね？

微笑んでいたつもりだったのかも知れない。
だけど、先生は涙を流していた。

「菜々富さんは、俺が今まで診てきた患者さんの中で、一番強くて弱い女性でね。それは精神面だけじゃなくて、身体の方もそうだ

つた。「

先生が淹れてくれたホットココアの湯気が、私を慰めるかのよう
に優しく揺れる。

「菜々富さん、正直に言つと、このままでは君には妊娠は無理だ。
妊娠しても子供は胎内で充分に育たないし、それ以前に妊娠する確
率は、今は限りなく0%に近い。」

「…………。」

（う・う・そ・う・う・う。そんなのウソ。）

「例え不妊治療をしたとしても、君の身体はもたない。」

口では待つて、と、言つている筈だった。

だけど、実際はガタガタと震えているだけだった。

（聴きたくない、聴きたくない！）

恐怖で震えているのに、それでも加賀見先生は、神様は、情け容
赦がなかつた。

「菜々富さん、君はスキルス胃癌の可能性があるやつだ。もしやう
なれば、余命はもつて一年、早くて半年だ。」

スキルス胃癌……。

それはとてもなく進行の早い、救いようのない死に直結する様

な病。

嘘だと、夢だと叫びたかったし、書いて欲しかった。

だけど西田から溢れ出す熱い涙が、現実だと私に知らしめる。

「治療は出来る限り手を尽くすべき、この手の病を克服する事はまず難しい。一度、精密検査をしてみないと……。」

加賀見先生の声は聞こえなかつた。

「…………先生っ、時間を…………考える時間を、私に下さい…………。」

やつとの事で絞り出した声は、絶望の色に染まつていた。
それほどまで、私は追い込まれていた。

(我ながら、なんて醜いのかしら…………。)

死にたくないと思つのはどうしてだろう。

その時、私の頭に浮かんだのは、あの人の顔だった。

(どうして…………。)

それを否定したくて、認めたくなくて、そして泣きたくなくて、私はその人の顔を頭から追い払う様に、頭を左右に振り、ソファーから立ちあがつた。

「先生、この事は、絶対に何がなんでも、誰にも言わないでおいて下さい。」

「菜々宮さん、もしかして、君は、旦那さんと……。」

「の人はなんて聴いのだろう。

「ええ。別れるつもりですから……。綾橋には他言無用にお願いします。」

つべづべ、私は幸せに縁がないらしい。

加賀見先生は私の暗い笑みを見て、本当に無念そうに、ギュッと手を閉じた。

私が時間が欲しいと言ったのは、未練を断ち切る為であり、心の整理をする為。

「先生? 私はね、菜々宮の人間でもないんですよ……? アノ人達は、私が気付いてないと思つてるんです。」

バカみたいでしょ?

スッと、立ち上がった私が、家族の話をした理由を悟ると、先生は更に悲壮な表情を浮かべ、「解つた」とただ一言だけ呟き、そのまま黙り込んだ。

少しだけ出歩くだけだった筈が、思わぬ話のせいで、私は夕方になるまで小部屋でぼんやりしていた。

余命を宣告され、家族の話をした後、直ぐに立ち去るつもりだつたから、私はすつと立ち戻したままだつたけど、加賀見先生は、回診に行つたのか、既にいなくなつていた。

どのくらいの間やうしていただけ？

「コンコン」と、響くノックの音に、私は小部屋の時計を見て驚いた。

時刻は18時を過ぎ、夕食の時間だつた。

「菜々富さん、夕飯の時間ですよ？」

ノックの主は、綺麗で健康そうな看護師だつた。

「すみません、今すぐ戻ります。」

「そつなさつて下さい。」「家族の方が心配なさつてますよ？」

(家族・・・?)

家族つて誰の事？

ああ、そうか。

看護師の言葉に、フフフと、暗い笑みを漏らした私は、心配して探しに来てくれた看護師を促し、一緒に部屋へと戻り、偽りの笑顔

を浮かべた。

病室にいたのは、想像していた通りの人達だった。

血の一滴の繋がつていない姉に、偽りの両親。そして、姉の優しい旦那様。

(そう言えばこの人は、区役所に勤めていたような・・・。)

「なに？吉乃ちゃん。僕の顔に何かついてる？それとも好きになっちゃった？」

私が顔を黙つて見ていた事に何を思ったのか、姉の旦那はふざけた様な事を言つた。

いつもならその程度の冗談は、笑いながら流していたけど、今日はダメだった。

今日は疎ましく、そして腹立たしい。

「寝言は寝てからにして下さい。貴方は菜々富家の婿なんですよ。それを自覚してらっしゃるんですか？」

一度決壊した思いは止まらない。

自分でもうしくないと感じつつ、辛辣な言葉を止める事は出来なかつた。

「帰つて。一度と姿を見せないで。あなた達の顔を見るだけで、お

かしくなるのよ……今日限りで縁を切つて……」

奇しくも、それは初めてあの人達に対する反抗だった。

看護師を証人にして、夕飯のお盆を激情のままひっくり返し、酷い人格を見せつけた私は、布団を被つて丸くなつた。

暗闇は私を守ってくれる。

家族から伝わってくるのは、憤りと苛立ち、そして、表向きの感情である戸惑いだけ。

看護師は加賀見先生から私の事情を聴いていたのだらう。

ひっくり返された食事を片付けながら、事務的な口調でアノ人達に帰る様に促した。

「お引き取り下さい。これ以上興奮せらるるとこちりが困りますので。」

「私達は家族なんですよー?」

「ドクリツ・・・。

心臓が嫌な言葉を聴き、悲鳴を上げる。

(助けて・・・、助けて・・・。)

「お引き取り下さい……警備員を呼びますよ。」

恐怖で怯えていたその時、力強い牽制の声が響いた。

その力強い声は、私を必死に守ろうとしているのか、決して揺るがなかつた。

幸い、私の病室は個室だつた為、他の人達に迷惑をかける事はなかつた。

看護師とアノ人達の互いに譲らぬ問答は、私の担当医の加賀見先生の登場によつて、あっけなく終わりを迎えた。

加賀見先生は、布団を被つている私の頭を優しく撫で、静に微笑む氣配がした。

「お嬢さんは明日には退院なさいます。そうですね、吉乃さん。」

その言葉には幾つもの含みがあつた事は、その時は、私と加賀見先生、そして、その場にいた看護師にしか解らなかつた。

、4 脳髄（脳脊髄）

壁です。ひたすら壁です。

、4 距離

（神様、アナタは意地悪ですね・・・。）

退院した私を待っていたのは、以前の生活となんら変わり映えのない毎日と環境で、相変わらず私は一般社員で、あの人は社長で、たとえ会社ですれ違つたとしても、他人のフリ。偶然一人つきりになつても、甘い雰囲気にはならない。

けど、今の私には皮肉だけれど、それが逆にありがたい。

きつと今以上の関係になつてしまつたら、私は死ぬのが怖くなる。もう一度、愛などと言つ愚かで醜惡な感情を知らない人形になつてしまえば、辛くはない筈。

（大丈夫、大丈夫。私は大丈夫。愛なんて、知らないーー。）

「吉乃、大丈夫か？なんかおかしいぞ？」

鬱々と、自分の思考の淵に沈んでいた私は、心配して私に声をかけてくれた類の言葉に、「そんな事ないわよ」と、言いたかつたのに、あまりの不安定さに、つい本音を口にしてしまつていた。

「ねえ、類。私達、なんで別れちゃったのかな・・・。恋人じゃなかつたけど、付き合つてたのに、約束までしてたのにね・・・。」

「ぐうう

類が息を呑むのが判つた。

(「めんね、類。）

人生をやり直せるのなら、やり直したい。

でも、ゲームじゃないんだから、それは叶わない。

悲しみと絶望にも似た、鬱々とした思考に沈んでいた私を、現実に引き戻してくれたのは懐かしい香りだった。

「なら、なら、やり直すか？お前さえ望めば、いつだって俺はお前を受け入れてやる余裕はある。俺だって、好きで別れた訳じゃない。けどな、お前はアイツと別れられるのか？」

誰もいない休憩室。

ほのかに香る煙草の匂い。

たつたそれだけなのに、私は昔を鮮明に思い出した。

初めてキスした日、映画を見に行つた日、照れながら、一人つきりで永遠を誓つた日。

「るー、るーつ、類つ！ー」

「吉乃、やめる！—唇が切れるぞ。何かあつたんだろ？ほら、話してみる。誰にも言わないから。」

唇を噛み、類に抱きつき我慢していた私を、類は呆氣なく見破り、優しく背中を撫でてくれた。

「昼休みもそれなり終わっちゃつたな。よし。久しぶりにあそこに行くか？」

類は意見を聴いているようすで、実際は類の中では店に行く事は決定事項。

そんな些細な懐かしさも相まって、私は自然と頷き、約束のキスを交わした。

そこに、なんら罪悪感は感じていなかつた。

仕事を定時に終わらせ、久しぶりに行つた店は、あの頃と何も変わつてなかつた。

唯一変わつたところと言えば、毎日口喧嘩をしていたオーナーと、バイトの女の子が結婚して、可愛い子供がいた事。

「あ～っ！…吉乃さん、久つしぶりい～！…元気だつた？」

「おい、仕事しないんだつたら帰れ。冬子」

「はつ？…ざけんな。このクソ野郎。アタシは吉乃さんに逢いに來たんだよつ…！」

そう言いながら、頬を真つ赤に染める冬子ちゃん。

(素直じゃないけど、可愛い。)

呪り田で、私より6歳年下の冬子ちゃんは、喧嘩腰な口調で言い

返しながら、大きなタッパーをカウンター テーブルに置いた。

多分、オーナーの為に作った夕飯だろう。
きっと、オーナーはなんだかんだ言いながら、それを食べると思
う。

それは、私と智ではありえない関係。

「まあまあ、冬子ちゃん、落ち着いて？ オーナーは冬子ちゃんが大
切なのよ、判つてあげて？」

「だな。コイツの愛情表現は、冬子ちゃん限定で無愛想なんだよ。
愛されてるな？ 冬子ちゃん。」

私と類にフォローされた冬子ちゃんは、不平不満をぶつぶつ並べ
立てながらも、満更でもなさそうに笑みを浮かべた。

カラソッシュ・・・。

グラスの中の氷が、音を立て奏で溶け、自身の存在をアピールす
る。

その懸命な事さえ、今の私には欠落している。

「ところで吉乃さん、結婚したって聞いたんですけど、本当ですか
？」

ざわり、と、何かが総毛だつたような気がした。
多分、それは嫉妬だったのだと思う。

小さな子供を抱きながら、私の近況を聞いてくる冬子ちゃんを、ほんの少し妬ましかつたけれど、私はゆっくりと頷き、白嘲の笑みを浮かべた。

「結婚はしたわ。けど、夫婦間の嘗みは無いわ。これは内緒だけど、時期を見て離婚するつもり。残された時間くらい、自由に使いたいじゃない？」

お酒の力を借り、口にした言葉は、涙に濡れていた。

（理由なんて、考えるまで無かつたわね……。）

だからこそ、今の私にはお酒と類が必要だった。

「怖いの、類。私、あと、1年位しか生きられないかもしねないんだって。なんで?どうして私なの?」

スキルス胃癌の可能性があるだなんて、言えなかつた。

あの家族とは自分から絶縁し、智とは会話すらしていない。

の人には、私なんかより、キレイで健康な人が相応しい。

（子供も作れない私は、役立たずなのよ……。）

悲しい。
悔しい。
寂しい - -。

「これから私はこんなにも弱くなってしまったのだろう。

「吉乃の悪い癖は、すぐに我慢するといいだ。今日くらいは素直になれ。ほら、コレモ外して。」

自然な動作で、あの結婚指輪を外され、バレッタも外された。

たつたそれだけ。

たつたそれだけなのに、私は素直に泣く事が出来た。

肩を震わせ、想いのまま嗚咽を漏らし泣く私は、とても26歳の大人には見えなかつただろう。

ただ、ただ、悲しくて、寂しくて。

髪を優しく撫でてくれる手が、その人じゃない事も、少しだけ哀しくて。

「なあ、吉乃。お前はもう誰が一番好きか判つてるはずだ。だからそんなに辛いんだよ。仕方ないよな。好きなのに諦めなきやなんないんだからさ。」

私を諭すかの様に話す類は、私が何を思つているのかを全て理解した上で、傍にいてくれる。

泣いて泣いて。

漸く涙が止まつた時、時間は既に深夜の2時を過ぎていた。

「お。やつと泣き止んだな。もう大丈夫か？ 今日も仕事だし、そろそろ帰るか。」

ウイスキー グラスを片手に、穏やかに微笑む類を見上げ、私は涙を袖で拭つて水を飲み干した。

少しだけ吐き気がしたけど、それは知らないフリをした。

「今日はありがとう、類。夏紀ちゃんにもお礼言つといて。」

「ああ、アイツも喜ぶよ。何しろ、俺と結婚する理由も吉乃が好きだからだしな。」

類の苦り切つた愚痴を笑つて聞き流し、私達はそこで別れた。

結婚指輪とバレッタを、昔の馴染みの店に忘れた事をえ氣付かず[二]。

家に辿り着いた時、リビングから灯りが漏れていたけど、私は何も考えずに家に入り、そして驚いた。

リビングには、顔色の悪い智がいた。

ビールを飲んだのか、リビングにはビールの缶が散乱していた。

「まだ起きてたんですか？珍しいですね・・・。」

部屋中に散乱している缶を拾いながら、何気なく話し掛けた私は、違和感を感じて、指を見た。

(なに・・・?)

おかしい。

何かが足りない様な気がする。

そして、はっとし、疑問はすぐに解けた。

他ならぬあの人の言葉によつて。

「お前にぞ珍しいな、こんな時間まで。」

確かにいつもより大分遅い帰宅時間だった。

「指輪もしないで、誰といった事やらい・・・。」

（そうよ、指輪よつ！）

その言葉で、私は羽織つていた薄手のコートのポケットの中に手を入れたり、鞄の中を探つたりした。

鞄を探つた時、密かに役所から貰つて、既に記入済みの離婚届が鞄の中でグシャグシャに丸まってしまったけど、その時の私は、とにかく指輪を優先して、探していた。

そして、店に忘れた事を思い出した時、私は迷わなかつた。

（確か、あの店はまだ開いてるはず・・・。）

拾い集めていた缶を放置し、私は真夜中の外へと飛び出して行つた。

“めんね。智・・・。

あの時、一度でもアナタの浮かべた辛そうな表情を見ていれば、私は間違った判断を下す様な事をしなかつたと思う。

けど、その時の私は、指輪が心配で、まさかあの人人が、智が、私を酷く切ない表情を浮かべて見つめている事も知らず、再び夜の街へと消えていった。

、5 離婚届（前書き）

色々変わったると思いますが、大筋は変わりませんので、変でしたら、
いつそり（あくまで、優しくお願いします。）教えてください。

初めて智と逢った時、私は虞と同時に強い恋心を抱いたのだと、今なら素直に思える。

だからこそ、私は心に何重にも鍵を掛けた。

決して傷付かないように、期待しないように、と。

けれど、その心の鍵は既にボロボロに錆び、限界を迎える、朽ち果てる寸前だった。

ならば、残された道は、選ぶ道は一つしかなかった。

したくもない決断を、私は「あの人の為に」、と、下して、逃げた。

テーブルには、温かいご飯と、あの人気が好きそうな料理。

好きそう、というのは、この二年間、ろくな会話すらしていなかつたから、好きな食べ物や好みが判らないから。

同じ家に暮らしながら、会話らしい会話は殆どしなかった。

(これで夫婦だなんて・・・。)

それも今日で終わりだと思えば、少し寂しい。

その為に、今日は会社側に無理を言って休み、一日を掛けて私物

をまとめ上げ、私が住んでいた痕跡を綺麗に消した。

最後の仕上げに、私は少しだけ化粧をして、あの人を出迎える。

「お帰りなさい、智さん。」

出来る限りの笑顔を浮かべ、仕事から帰ってきたあの人を、智を迎えた。

おそらく結婚式以来の微笑みで、私は智を見上げていたのだろう。

「お仕事お疲れさまでした」

普段とは異なる私の態度に、智はじつと観察し、まるで壊れ物を扱うかのように抱きしめてくれた。

存在を確かめつつ、そして、決して離さないという意識が伝わってく るような、温かい抱擁。

その抱擁は、私が病気を知る前だったのなら、素直に受け入れられていた。

でも、もう私は知ってしまった。

（もう、過去には戻れない・・・。）

愚かにも、勝手に抱き返そうと動き出していた手を、ギリギリのところで抑え、智の肩にかけ、やんわりと突き放す。

「吉乃・・・？」

ここで疑問を持たない人間なんて、誰もいない。

智だつて気付いてる。

それでも私は辞めない。

「ねえ、智さん。私の事、少しだけでも愛してくれてる?」

(私は、狡い。)

憎んでくれてもいい。
いや、憎んでほしい。

解つていっても、どうじてこの手を使わずにいられなかつた私
を。

(ごめんね、貴方は最初から優しかつたのに。最初から最後まで・
・。)

身体を重ねなかつたのは、私が初夜の日にフラッシュバックを起
こして拒否したり、体調が優れなかつたから。

それを私達の中に愛がないと勝手に決め付け、すり替えたのは他
ならぬ私。

「智さん、離婚して下さい。」

この言葉は、私から貴方への、最初で最後の愛の言葉。

「愛してるなら、私と別れて下さい・・・。」

心の奥底では、別れたくないと泣き叫んではいるけど。

これは貴方の、智の為だから。

「私、好きな人ができたんです。お腹に、その人の子供もいます。彼となら、私は幸せになれるよつた気がするんです。」

極上ともいえる微笑みを、必死に作って、浮かべた。

その必死な一世一代の演技は見破られることも無く、相手を確実に傷付けた。

どれだけ時間が経つた頃だらうか。

智が出した答えは、私を驚かせ、そして安堵もさせ、少しだけ狼狽させた。

「吉乃、別れるも何も、俺達は最初から夫婦でもない。だから勝手にしろ。」

(今、何て言ったの？最初から夫婦じゃなかつた？)

「お前と夫婦だった事など一丁たりともない。田障りだ。さっさと出て行け。」

苛烈な怒りと言葉。

その言葉が、声が、私を徐々に支配し、そして、最後に私の表情を完全に支配した。

心とは正反対の、とても穏やかで、幸せを掴んだよつた微笑みと口調で、私は別れの言葉を口にした。

「今まで一緒にいて下さり、ありがとうございました。いつまでもお元気で。幸せになつて下さい。」

頭を下げ、スタッフと寝室に荷物を取りに行き、一応、記入済みの離婚届をダイニングテーブルに置き、私は智に真実も行き先も告げずに、家を出た。

外は雨が降っていたけれど、それは今になつて溢れ出した涙を隠すには、都合が良かつた。

まるで、お風呂の浴槽が引っくり返された力のよつな、激しい雨に打たれながら歩き、私が辿り着いた場所は、つい先日、運び込まれたばかりの罹りつけの病院だった。

緊急搬送口兼入り口に、びしょ濡れ姿で現れた私を見つけるなり、その場に偶然居合わせた看護師さんは、私の傍まで走ってきた。

「菜々富さん？こんな時間にどうされたんですか？」

(驚くのも、無理ないわよね・・・)

ただでさえ、診察時間は過ぎてこるといつのに、更に私は大きな鞄を持っている。

「まさか、入院しに来たの・・・？」

信じられない、と、その声は感情を伝えていた。

私はその言葉を肯定するよつてやつくりと頷き、決意を込めた、

しつかりとした声で返事をした。

「よろしくお願ひします。もう、身体中が痛くて、我慢できないんです。」

大切なものは全て捨ててきた。
だから私はもう、何も怖くない・・・。

、5 離婚届（後書き）

一端、区ります。

次回、短いかもです。

、6 別れた姉の眞実（前書き）

今回は利依さん視点です。

、6 別れた姉の眞実

私、
綾橋 利依、27歳。

私には少し年上の離れた兄さんがいる。
その兄さんの様子が、最近どこかおかしい。

急に実家に帰ってきたかと思えば、新築して3年しか経つてないマイホームを売つたり、（これはお父様が内々に買い取つた。）得意でもないお酒に手を出してみたり。
そして一番おかしいのは、あの義姉さんを手放した事。

あらゆる手段や伝手を駆使して結婚したのに、どうして離婚したのだろう。

兄さんは義姉さんが浮気して、別れて欲しいと言われたから、別れてやつたと言つているけど。
だけどね？

（そんな事、信じられる訳ないでしょー…?）

確かに兄さんは無愛想で誤解されやすい人だけど、本当はとても繊細で孤独で、誰よりも脆い人。

小さな頃から宗一兄さんと常に比べられ、綾橋の帝王学を叩き込まれ、完璧を求められてきた兄さん。

そんな兄さんに近づいてくる人達は、みんな綾橋の財産と名前、兄さんの姿だけが目的だった。

兄さんもそれを知っていたから、ある時期から女性とは付き合いはしても、結婚だけは絶対しようとしなかった。

その兄さんが3年前、日本に帰国して少したつた頃、初めて私達家族に結婚しても良いと、一人の女性の写真を見せてくれた。

泣き黒子が印象的な、大人しく、優しく、穏やかに微笑む可愛い女性だった。

それが今回浮氣して、兄さんの所から去つていった義姉さん、菜々富 吉乃さん。

義姉さんは私より一つ年下だったけど、兄さんを良く支えてくれていた。

お父様やお母様さえ知らない、食の好みも完全に把握していた。兄さんも義姉さんを本当に愛してた。

兄さんと義姉さんは、私の理想の夫婦像だった。

(なのに、どうして…どうしてなの？義姉さん。)

兄さんが急に家に帰ってきた日、兄さんは離婚届を手に持つていた。

そしてその夜、私達家族は驚きのあまり、氷の様に固まってしまった。

あの、何が起きようとも決して表情を崩さない、見せない兄さん、

一部の人達からは冷酷とさえ言われている兄さんが、肩を震わせ、涙を流し、私達家族の前で泣いたのだから。

(義姉さん、どうしてなの？兄さんのどこが悪かったの？)

兄さんの事で、これ程驚いたのは、この時が初めてだった。

兄さんの初恋は、間違いなく義姉さんである、吉乃さん。

兄さんは、その初恋の相手である義姉さんから離婚届を突き付けられた。

(辛いわよね・・・これは、泣くしかないかも。)

でも、驚くのはまだ早かつた。

兄さんも変な所で人が良いのか、単純なのか、夢見がちなのか、籍も入れてなかつたと、これまた爆弾発言をしてくれた。

兄さん曰く、

『本当に信頼してもらえ、許して貰えたら、籍を入れるつもりだった』

(兄さん、今時、そんな人何処にもいないから！――)

その日から、兄さんの感情や表情から「笑顔」や、「微笑み」、「喜び」は消え、昔の蠅人形みたいな、冷たい、温もりの欠片も感

じられない兄さんになつてしまつた。

*

私がその日、その病院にいたのは、不眠症になってしまった兄さんの為に、仕事で忙しい兄さんに頼まれ、代わりに眠剤を貰いに来てからだった。

だけど、私はその日の偶然を、後になつて深く感謝した。

(どうだけ待たせんのよー! 予約時間過ぎるじゃなー!)

苛々と診察室の待合室で待つていた私の耳に入ってきたのは、ここには居るはずのない人の声と名前。

「菜々富さん、本当にご家族には連絡できなんですか？これは貴女の命にかかる重要な事なんですよ？」

「…………、良いんです。私には家族なんていませんから。」

「菜々富さんっーー！」

(ウソ、でしょ?どうして義姉さんが・・・?)

兄さんは義姉さんが浮氣して、出でて行つたといつていた。
なのに、どうしていきにその『義姉さん』がいて、声がするのだ
から。

私が何も出来ないでいる間にも、義姉さんの苦しそうな声は響い

ていた。

(義姉さんが消えて、兄さんと別れて今日で一週間。)

「もう、放つておいて下さい。私の命は私のだけのもの。私が死んだって、誰も悲しんだりしないわ!!」

廊下にまで良く響く声は、どんなに願つても、間違いなく義姉さんの、弱々しく、悲しい色が混ざり合つたものだった。

「まだだわ。」

「ええ。でも、あの子も可哀想な子ね。よつこよつて進行性の癌だなんて・・・。」

「もう、手術も手遅れなんですって。」

勝手な事を言わないで欲しかった。

(義姉さんも義姉さんよ!-!)

ヒソヒソと囁き合つての人達の言葉が、何よりも義姉さんの言葉が、私の胸を深く抉り、斬りつけ、傷付けた。

(迷つてる暇なんて、迷う必要なんて、ないわ。)

私は兄さんの眠剤も受け取らず、急いで家へ帰った。

今ならまだ間に合つかもしない。

それは根拠も理由もない、ただの勘だった。
けれど、私はその勘を、不思議と外れる事がないと、確信してい
た。

、7 零れた本音と、温もり

(今日で、入院してから一ヶ月。)

もう、世間では真夏を迎えるべく、梅雨入りしていて、日本独特の蒸し暑い気候に晒され、それでもこの初夏を楽しんでいる。

(だけど、私は。)

この白くも狭き、快適な牢獄に、望んで収まっている。

病院側には頼み込んで、面会謝絶にしてもうつっているから、お見舞いに来る人達はない。

いや、入院している事さえ、誰も知らないし、私も知らせてはいけない。

私が入院している事を知っているのは、病院側の先生と、どんな因果があるのか、智の従弟であり、私が個人的に雇った弁護士の咲田紘一、28歳だけ。

彼は優秀で、依頼人が私であるという事を知ると、すぐに動いてくれた。

そんな彼のおかげで、私の退職手続きは、彼を通して迅速に全てやり遂げられ、受理された。

それで、今の私に残されているのは、『菜々富 吉乃』という名前と、性質の悪い病と、少ないと言えない預貯金だけ。

もし、生き長らえる事が出来るのなら、お金の使い道はたくさん

あるだろ？けど、死ぬのなら、残したい相手がいる。

受け取つて貰えるかは分からないけど、受け取つて欲しいと思うのは、私の我儘だろうか。

(虫が良すぎるかしら、ね？)

ふ、と、微かな衣擦れの音に、そんな事を考えつつ、夢と現の間を気持ち良くなづいていた私は、目を開いて、そこにいるはずのない人達の姿を見て、驚いた。

(どうして、いるの？)

「吉乃さんっ！…」

驚きつつも、生きる気力も、努力する心も失った私を見て、ギュッと、勢いよく、すっかり痩せ細り、女としての魅力のなくなつた私の身体に抱きついてきたのは、あのお馴染みの店の【club・シーケンス】の冬子ちゃんだった。

その冬子ちゃんを呆れつつも、温かく見守つているのは、彼女と結婚したクラブのオーナー。

冬子ちゃんのいつもと変わらぬ態度と雰囲気に、驚きと戸惑いに揺れていた私は、再び「吉乃さんっ」と、呼ばれた事で、漸くこれが現実なのだと受け入れられた。

「吉乃さんはなんで私達がつて、思つてるんでしょ。答えは簡単。私のお姉ちゃんが吉乃さんの担当ナースだからだよ。」

私の担当ナースは、主に一人。

女性は神向 紗千さん、男性は高江 槟さん。

一人とも、とても私に親身に接してくれている。

それで冬子ちゃんのお姉ちゃんが、私の担当ナースだというのなら、神向さんしかいない。

「神向さんか？」

私の質問に冬子ちゃんは頷いた。

だけど、冬子ちゃんは神向さんと全く似ていない。

「似てないと思つてるんでしょ。当たり前だよ。私は親父の愛人の子供だし。」

冬子ちゃんは疑問に思つて当然。とばかりに、私の疑問をザックリと解決し、私の身体を解放し、表情を改めた。

その冬子ちゃんのいつもと違つ雰囲気に、私は嫌な予感がした。

（やめて、お願いだから、やめて。そつとしておいて。）

……やっと全部、諦められたと思つたのに。

そして、その私の嫌な予想は的中した。

「吉乃さん、なんで何も言つてくれなかつたんですか？そんなに私達の事、信頼できないんですか？はつきり言つと、時々、吉乃さんところと虚しかつたんですね、まるで私達が存在してないようにな

無視されて

・・・ドクリツ・・・。

心臓が、強く、脈を打ち始める。

(やめて、それ以上、言わないで。)

私の願いは天に通じる事無く、冬子ちゃんはペラペラと話し続ける。

「知っています？ソーユーの、独り善がりって、ゆーんですよ？あ、あとは自己陶酔とか。とにかく、自分だけが不幸だと決めつけて、自分が作り上げたその架空の世界で、それに酔っちゃうんです」

冬子ちゃんの言葉が痛かった。

冬子ちゃんの言葉は、否応なく私の心の扉を蹴り、殴りつけてくる。

現実から目を逸らすな。
きちんと立ち向かえ。と。

けれど人は、時としてそれを酷く厭う。

そして、私の心の番人は、扉を抉じ開けようとした無頼者を、凍てついた態度と口調で追い払う事を選んだ。

(何も知らないお前に、何が判る！－！)

心を、耳を、感じ得る全ての感覚を閉ざし、抵抗する。

「何か言つたらどーですか？」

冬子ちゃんの田には、憤りの炎が爛々と宿っていて、私を強い眼差しで貫いていた。

本氣で心配してくれてするのが判るのに、それが逆に嫌で、憎くて、私の口から零れるのは、鬱屈した拒絕の言葉だけだった。

「誰が、心配してくれだなんて、言いました？」

自分でも、よく「」まで怖い声が出せるな、と思つくりこの、嘆れた、低く冷たい声は、冬子ちゃんの言葉の前には無力にも等しかった。

その証拠に、冬子ちゃんは鼻笑いを漏らすなり、激しい口火を切つた。

「は？ 心配？ 笑わせんな。アタシはアンタなんかの心配なんぞしねーよ。アタシは姉ちゃんを困らせてるアンタがムカつくんだよ。」

普段なら氣付く、冬子ちゃんの口調の変化に、私は氣付けなかつた。

そこまで、私は攻め込まれ、心の余裕がなかつた。

私はあからさまな冬子ちゃんの挑発に、まんまと嵌められていた。

田の前で、でかい態度で椅子に座り、挑発してくる人が憎くて、

妬ましくて仕方がない。

「・・・つたら、だつたら早く帰ればいいじゃないーー!」こんな、もうすぐ死ぬかもしれない私なんか放つておいてーー!」

(やうよ、私は誰も来て欲しくなかつたーー。)

私の言葉に、冬子ちゃんのキレイに整えられた眉が、ピクリ、と、微かに動いたことも私は見逃した。

「誰も私なんか死んだって、悲しまないわーー。」

「え・・・? 死ぬつて、どういつ事・・・?」

判つてゐくせに、と、私は晒つた。

「白々しい。神向さんから聞いたんでしょ? 私が進行性の胃癌に侵されてるかもしないってーー! 余命も宣告されて、一年位しかないつて」

私の激しい剣幕に、わらわらと人が集まつてくる。
その中には、加賀見先生もいた。

「なにも知らない癖に、私がどんな思いでいたか解るーー?」

脳裏に走馬灯のように駆けていくのは、女として、そして妻としての屈辱に満ちた耐え難い日々の数々。
心を空にして、愛をなじよつて自分自身に暗示を掛け続け、騙しながら生活してきた日々。

「目の前でキスされた事はある？ないわよね？ない人には判らない感情でしょうね。いつかは、いつかは私を見てくれるんじゃないかなって、私だけを選んで、見てくれるんじゃないかなって。何度も何度も期待しては裏切られてっ……。」

「ゲホッ、ゲホッ、と、咳をした瞬間、口の中に広がった鉄の味に、私は愕然とした。

ガクガクと、小刻みに震えだした自分の身体に、私は発狂しそうになつた。

自分で吐いた血が、信じられない。

（怖い、コワイ、こわい。）

「吉乃さん……？」

すっかり困惑した様子の冬子ちゃんが、私の背中を擦りうつとした。だけど、私はそれを拒んだ。

「なんで私なのよ！なんでこんなに苦しいのよ！死にたくないのに、本当は愛してる好きだって言いたいのに、私だけだって言って欲しいのに、どうして私なのよ！？」

どうにもならないもどかしさから、錯乱しかけた私は、ついに、言つてはならない言葉を口にしてしまつた。

「疲れた……、もう、死にたい。こんなに辛いのは耐えられない。・・・。もう、何もかもが、嫌……。」

それは生きる事を諦めた事を意味する、負の感情、負の言葉。

(死ねば、楽になる?)

出来る事ならば、元気になつて、全てをやり直したい。

けど。

クスクスと、暗く、歪んだ笑い方をする私は、もう尋常な人間に
は見えなかつただろう。

実際、私には誰も近付こうとはしなかつた。

冬子ちゃんでさえ、私に声をかけるのを躊躇つていた。

うう・・・。

たつた一人、あの人を除いては・・・。

ギュッともきなり抱きしめられた私は、暫く自分の身に何が起
きたのか、理解出来なかつた。

理解できたのは、抱きしめてくれた人の、声、香り、そして、何
よりも求めていた愛しいヒトの温もりが伝わってきてから。

(うう・・・、うう・・・っ)

「吉乃・・・、もう我慢しなくて良い。もう、全部判つたから。だ
からそんなに悲しそうに、全て諦めたように泣くな。・・・、俺が

いるから。」

守るから。

と、穏やかに言われた言葉。

抱きしめられ、感じた温もりは、私が諦めていた人のもの。

「吉乃……？」

（どうしよう……。嬉しい……。）

あまりにも嬉しくて、信じられなくて、夢じゃないか確かめたいのに、私の身体は智から中々離れなかつた。

ついでにまで死にたいと願つていたのに、なんて幸せなのだろう。

（夢なら、覚めないで……。）

そう願い、思つた瞬間、私は猛烈な眠気に襲われ、智に抱きついていた腕から、力が抜けた。

「吉乃……？ 吉乃！！」

智の悲痛な顔が見える。

（ああ、そんな顔しないで？ 疲れて、少し寝るだけだから。）

ゆつくつと沈んでいく意識の中、私は、かろうじて微笑んだ。

「智・・・、大好き・・・。」

これが限界だった。

グラッと、頭から倒れた私は、智の心配をよそに、それから二日三晩、昼夜と眠り続けた。

その間見た夢は、最高に幸せで、涙が枯れるほど嬉しいモノだつた。

、 7 零れた本音と、温もり（後書き）

次回に続く。

、8 知前？（前書き）

これからどんどんありえない展開に転んでいきますが、どうか批判はなしの方向でお願いします。

、8 名前？

夢なら永遠に醒めないで欲しい、と、確かに私は初めて、心の底から誰かに願つたかもしれない。

けど。

窓からさうさうと朝日が降り注ぎ、その朝日の眩しさで眼裏を刺激され、仕方なく嫌々ゆっくりと瞼を押し上げれば、まず最初に、ここ一ヶ月間もの間にすっかり見慣れた、薄いモスグリーン色の天井が目に入ってきた。

私に与えられている病室は個室で、基本的にモスグリーンと、水色、それからオレンジ色で統一されている。

天井はもちろんのこと、壁紙やカーテンも薄いモスグリーン色で、コップや洗面具は水色、パジャマや差し入れの本のブックカバーや花は、少しでも私の気分が明るくなるようひとと、全てオレンジ色系統の暖色。

これらの身の回りを整えてくれたのは、紗一さん（お世話になつてるから、これからは『さん』づけにする。）と、看護師の二人。

何回か眼が慣れるまで瞬きを繰り返し、枕の上で首を右に向け、目覚まし時計で時間を確認しようとした時、私の眼に飛び込んできた光景に、私は一瞬、ここが病院である事を忘れた。

私が見たものは、智の寝顔だった。
しかも髪は乱れ、寝ている時でも色氣を無意識に放つている。

ここで言つておきたいのは、私と智は新婚旅行さえ行つていないと
仮初の夫婦だつたという事。

(何か、寝ている時も色氣があるって・・・、)

寝起き、しかも今は病身の身である私には、衝撃的すぎて、そして、心臓に悪くて、目の毒にも等しいものだつた。

そのせいで、目覚めたばかりだというのに、心拍が上がり、暫く何も出来なかつた。

出来たのは、穴が出来るんではないかと思われるほど、その寝顔を見つめ、隅々観察する事だけ。

そうして、心ゆくまで観察した私は、寝乱れていた智の髪を直そうとして、初めて自分の手が、大きな智の手に、包み込むように握られている事に気付き、面映ゆくなつた。

智の手は、意外にも小さな傷や火傷の痕があり、とても社長として君臨している人の手とは思えなかつた。

そこで思い出したのは、私が入社した時の社長が、綾橋のお義父様だつたという事。

(私、貴方の事、何も知らないのね・・・。)

改めて、私達は何の努力もしていなかつた事を思い知らされた。

そして考へ込んでいる間にも、時間は刻まれている。

眠りが浅いのか、智は私が少し身動きしただけで、鋭くも魅力的

な瞳を開いた。

(写真でも撮つておけば良かつた・・・)

ついつい、唇を尖らせてしまつたのは、そんな良からぬ事を考えていたから。別に不機嫌だつた訳ではない。

ただもう少し智の眠りが深く、手元にカメラがあつたら、と、思つていただけ。

智は、そんな私の不貞腐れた顔がお気に召さなかつたのか、私の手を離したかと思いきや、ベットの柵を外し、枕と頭の間に腕を入れ、覆い被さるように私の唇を、自分の唇で塞いできた。

何度も言つが、今は寝起きで、しかも本来は清々しい筈の朝である・・・。

ここ最近は梅雨空だった空も、今日は久しぶりの青空が広がつて

いるといつのに。

智は私がどこか冷静だつたのを、感知したのだろう。

徐々に深く執拗になつてくるキスに、私はすぐに酸欠状態に陥り、掴まれていなかつた左手で智の背中を何度もバシバシと強く叩き、それで解放してもらえた。

唇が離れた時、智が自分の唇を舐めたのを見た瞬間、猛烈に恥ずかしかつた。

顔から火が出るんではないかと、本気で思つたし、顔が熱かつた。

それを誤魔化すため、私は身体をベットの上に起こし、何度か深

呼吸を繰り返し、本音混じりに呟いた。

「…………、殺されるかと思つた。」

田覚めておそらく一時間もしない内に、今度こそ死神に永遠に田を醒ませない世界へと、連れて行かれるのではないかと思つた。

それは嫌だ。

いくらなんでもそれは嫌すぎるし、早すぎる。

ブチブチ文句を並び立てていた私を見ながら、智はやつさまで自分が座っていたパイプ椅子に座り直すと、足を自然に組んだ。

そして。

「何か言つ事はないか？吉乃。」

真つ平らに近い胸元を撫でながら、羞恥心や、その他の感情を整理していた私は、智のその言葉の意味が理解できなかつた。

少し考えてから、そう言えばと、思い出した。

忘れてはいたが、これでも智は古くは公家の流れを汲む、名家の跡取り息子。

世が世なら、貴族である。

なので挨拶や礼儀には、殊の外煩いし、厳しい。

さて、ここで私はなんと返した方が良いのだろう。

(呼び捨ては不味いわよね。かといって、今更、智さん、なんて呼

べないし、夫婦でもなかつたんし……。そつか！…）

「おはよひがります、綾橋社長」

これが正解だらうと、胸を張つて答えた私に、智は「違ひ」と、小さく返した。

何が違うのだろう。

智は何が言いたいのだろう。

（なんなの？違ひって何？）

モヤモヤしていた私の注意を惹くよつて、智は私の顎を長い指で拘束し、正面を向かせ、ゆづくつと言葉を紡いだ。

「心配したんだぞ、なんで本当の事を言わなかつた……。俺だけじゃない、利依も、親父も、母さんも、みんな……。」

そつと顎を解放され、智の手はそのまま私の髪を撫で、額にかかる髪をかき上げ、そこに小さなキスが落ちてきた。

それはまるで、小さな子に、親が宥めるよつな優しいものだった。

、8 略前？（後書き）

事情により、一端区切ります。

、9 知前？（前書き）

まだまだ先は長い・・・です。

少し原作のモノより書き足したり、書き換えてるので、原作を読んでる方々には申し訳ありません（原作といつても、作者が書いたものです。）

、9 名前？

誰かに頭を撫でてもらひるのは、類以外では、初めてだつた。

ほんわかと、心が暖かくなつて、無意識の内に口元が緩みかけていた私は、そこでふと、一つの疑問にぶち当たつた。

三日三晩眠つていたせいで、頭を少し傾げた時、凝り固まつた筋肉がゴツリツと、凄い音を立てたが、そんなことは構つてられない。私は目覚めてから、朝に相応しくないキスを智にされた。その智が、なぜ、ビタリとこにいるのか。

(あれは、夢じやなくて現実だったの？)

人は基本的に、自分の都合に悪い事を忘却したり、夢だと思いこむ事がある事は、知識としては知つていて、それが自分に起つる事はないだろうと、私は今まで漠然と構えていた。

しかし、現実はそうそう甘くはなかつた。

浮かんできた答えと云つべきか、自分で導き出した答えに、私は自分の顔から炎が出るんではないかといつくらい動搖し、とりあえず、先程から私の返事を黙つて待つて待つている智にすべく、心持、作つた声と顔で謝罪した。

「心配をお掛けしまして、申し訳ありませんでした。後日、お礼に上がります。」

あくまで、生きていたらの話である。

智は私のそんなシラツとした態度と、言葉の何処がおかしいのか、ククク、と、喉の奥で笑いをもらし、乱れた髪を左手で搔き上げた。

その際、ワイシャツの袖口部分を止めていたカフスが、太陽の光を反射し、きらりと光りを弾き、紅く輝いた。

私がそのカフスに目を捕られていると、智はそのカフスを外しながら、愉快そうに言葉を紡いだ。

「随分、他人行儀だな・・・。覚えているんだろう? 吉乃。」

ミシッ。

ベットが軋む音がし、いつの間にかまたベットの上で、耳元まで迫られていた私は、両手で顔を隠した。

左腕には点滴が挿され、腕を曲げると少し痛かったけど、そんな事は構つてられなかつた。

なのに智は、そんな私を、まるで鼠を追い込んだ猫のように、からかう様に耳に息を吹きかけながら、早く名前を呼べと、催促する。

「ほら、遠慮するな・・・。呼んでみる、吉乃。」

安い少女漫画や、生チョロい三文小説でしか見聞きしたことない展開に、誰が抵抗できようか。
いや、できないはずだ。

(お願いだから、そんなに近づかないでえーーー！)

色気満載の声色で、少なからず好意を抱いている相手から、自分たちの一人以外、誰もいないところで、迫られている所を想像してみて欲しい。

誰もが陥るであろう症状に、私も敢無く嵌つた。。

熱湯で茹でられたタコの如く、首から上が全て真っ赤に染まつた私は、降伏の証に言葉を発しつた。

「さと・・・し・・・つ？」

最後の最後で、末尾に疑問符を付けたのは、せめてもの抵抗である。いくら普段は内心で呼び捨てにしてはいても、実際に呼ぶとでは大違いである。

(名前を呼ぶのが、こんなに恥ずかしいなんて・・・ッ)

ドクドクと早鐘を打つ心臓を宥めつつ、両手を顔から離した私に待っていたのは、初めてみる智の表情だった。

智は蕩けんばかりの、凄絶な甘さと妖艶さを含んだ、美しい微笑みを浮かべていた。

人は誘惑には勝てない、ダメな生き物だと、私はこの短い時間の内に実感し、それを身をもって体験した。

私は甘い砂糖に誘われた蟻のように、智に全神経を向けた。

言葉なく絡み合つ視線。

それに伴い、病室には相応しくない、甘い空氣と雰囲気が漂う。

その雰囲気に促されるまま、私は瞳を閉じ、智を受け入れ、智の後頭部に腕を回した。

重なつては離れ、離れては重なり、それが何度も繰り返されたあと、智は私の耳をペロリと舐めた。

耳を舐められた私は、その淫靡な甘さに、身体がピクリと反応してしまった。

(か、身体が熱い、恥ずかしい。)

しかし、誰もいなくて良かつた、と、安堵のため息を吐こうとした時、その声はした。

「あら、目が覚めたの？」

ひゅつと、智が息を呑むのが判った。

きっと、彼も知らなかつたのだろう。その証拠に、少しだけ、声が低い。

「・・・、母さん、いつからそこにいたんですか？」

「なあ～に？私がいやあ悪かった？さつきからよ～」

ふふふと、妖しげに、明るく笑いながら姿を現したのは、智の母親であり、私の憧れの女性である、綾橋 さくら さんだつた。

、9 名前？（後書き）

姑のやくら、登場です。

続き、投稿した方がいいですか？

まで、次回。

、10 姑・やくらの策略（前書き）

大分、細切れで改題しています（笑）

、10 姑・さくらの策略

綾橋のお義母様こと、綾橋 さくらさんは、50代とは思えない若々しさと、スタイル、美貌を持つ人。そのせいか、さくらさんと一緒に街を歩けば、ほぼ百パーセントの確率で声を掛けられる。

ベットを覆う、薄い緑色のカーテンを手早くまとめたさくらさんは、顔を綻ばせ、私に歩み寄ってきた。

「ああ、吉乃さん？顔を良く見せて？」

いつも笑顔を絶やさないさくらさんは、それと同時に非常にマイペースで、人がどんな状況にいようが、遠慮は一切ない。

アレを見られ、聴かれていたんじゃないんだろ？かと、モヤモヤ考えていた私は、それでも心配と迷惑を掛けてしまったのだし、と思いつながり、ゆっくりと伏せていた顔を上げた。

さくらさんは満足そうに微笑みながらも、私の頬に手を伸ばし、柔らかな手つきで私の顔を挟み込むように包んだ。

そして 。

「あらあら、すっかり瘦せちゃって。どうせウチのバカ息子のせいでしょうナビ。『めんなさいね、吉乃さん。』

頬にあつたはずの手が、あっちをペタペタ、こっちをペタペタ、私の女として魅力のない身体のありとあらゆるところを撫で擦り、

触れてくるやくらさんは、同性とはいえ、とても智の母親とは思えないほど躊躇いもなく、「ノリコニケーション能力が高いと思った。

「痛むところは無い? 具合はどう? 吉乃さん、貴女には綾橋の女として、この綾橋の家を継ぐ子供を産んでもらわなければならぬのだから、病気には負けとはいられないわよ?」

綾橋の女。

その言葉を聞いた瞬間、私の心が急激に冷えていくのが分かった。

(私は、私だわ・・・。誰のモノではないのよ)

暗く淀み始めた私をそのままに、吉乃さんは尚も熱く熱弁を続ける。

「だから、絶対病気になんか負けないで、一緒にお家に帰りましょう? 智さんの妻は貴女しかいないのだから。」

(智の妻は私しかいない?)

意味が判らない。

だいたい、私と智は夫婦でさえなかつたのに、今更そんな事を言われてどつにもならない。

智にどうこう事だ、という意見あいの込めた視線を向ければ、智はあやふやに笑つて誤魔化した。

確かに吉乃さんは、綾橋の女としてと、言った。
でも。

(なんだ、こんなに胸が痛むの？)

これが最善だと思つて行動し、決行したあの日。

今更胸が痛むなんて、図々しいし、女々しい。そして何より醜い。
徐々に自己嫌悪に陥り、暗くなり、俯いていく私に、智とくら
さんは私に言葉を掛ける。

「吉乃さん？ ビーツしたの？」

「吉乃、顔を上げる。」

そんな事を言われても、顔は中々上げられない。

手前がつてな感情だけれど、情けなくて、悲しくて、切なくて、
顔なんか上げられないし、こんな顔なんか見せられない。

私の心の中で、ぐちゃぐちゃに覗き合ひの感情と理性。

中々顔を上げられないでいると、さくらさんは持つて来た鞄の中
から大きな花瓶を取り出し、それをベットから少し離れた所にある
テーブルに置いた。

花瓶は艶やかな白磁に、紅い染料で格子模様が引かれている質素
なものだった。

「やうやく、言い忘れていたわ。」

さくらさんは機嫌が良いのか、鼻歌を歌いながら、まるでそれが当然だという様にけろりと言つた。

「吉乃さんと智さんの婚姻届だけじ、提出しておいたからね。これで名実ともに吉乃さんは私の可愛い娘よ。ああ、早く可愛い孫の顔が見たいわ 最低、三人は欲しいわねえー。」

「・・・!!」

驚きと孫発言に向も言えず、漸く上げた顔をさくらさんの方へ向ければ、さくらさんはウキウキと向田葵の造花を花瓶に生けていた。

（なんでそんなに明るくて、楽しそうなの・・・。）

「ひつけは混乱してるの・・・、と、恨みそつこなつた時、さくらさんはねぐねぐ振り返り、にやり、と黒い微笑みを浮かべ、智を見た。

さくらさんはその黒い微笑みを湛えたまま、黄色いクマのぬいぐるみを私のベッドのサイドテーブルに置き、温かいお湯の入った洗面器と、タオルを何本か用意した。

さくらさんは手早くタオルを洗面器のお湯に浸して搾り、有無を言わざぬ勢いで迫ってきた。

「ああ、吉乃さん身体を拭くから、パパッと服を脱いで頂戴?」

「しつ事とやる事が人と違う。」

それもさくらさんの特徴だった。

さくらさんは私が着ていた病衣の紐を解き、容赦なく上着を剥ぐ
ように脱がし、慣れた手つきで絞つたタオルで身体を拭いていく。

抵抗むなしく、剥かれた私は背中を丸めるしかなかつた。その首
もとで揺れる、小さな指輪。

その指輪を見たさくらさんは、更に笑みを深くした。

「まあまあ、吉乃さんたらなんて可愛いのかしら。それ、智さん
が吉乃さんにあげた指輪でしょ？」

ちらりと、意地悪気に智を見て、ふふふと、笑いを漏らす。

「それはね、実は私が智さんに頼まれて、デザインから装飾まで全
て手掛けた、唯一無一の特別なお嫁さんの為のモノなの。ね？ 智さ
ん。」

そこで話を振られた智とバツチリと視線が合い、私は体温がドン
ドン上がるのが判つた。

「うえ・・・？」

「あら、どうしたの？ あなた達、顔色が真っ赤に染まつていてよ？」

さくらさんは策士だ。そうに違ひない。

私と智が真っ赤になるのは当然だ。

私達は身体を重ねるどころか、お互に明るい場所で肌を晒した
事もないのだから。

わくらさんは[冗談半分だったのだろうか、私と智がなにも反応しない所を見て、口元にタオルを持った手を持っていき、大袈裟に嘆いてみせた。

「まさかとは思ひけど、智さん、貴方、まさか、まさか・・・、な

の?」

わくらさんが言いたい事は、痛いほどわかる。

仮にも2・3年近くも一緒に男女が住んでいて、そういう関係になつてないのは、世間一般的にはありえない。

「・・・・。」

「・・・・。」

無言が肯定だと取つたのだろう。

わくらさんは急に両手をパンと叩き合わせ、にっこり微笑んだ。

「智さん、私、吉乃さんの病状を先生から聞いてくるから、後は口シクね？ 全身、拭いてあげるのよ？」

ハイテンションでタオルを智に渡し、最後は智を焚きつけるように言い、私に意味の判らない「頑張つて」といつ言葉を残し、部屋を出つて言つた。

(お義母様、何を頑張れと仰るのですか!-)

わくらさんが出ていった病室は、妙な沈黙が流れた。

でも、その沈黙は長くは続かなかつた。

ふうーっ、と、長い溜息を吐いた智は、着ていたジャケットを脱ぎ、腕まくりをした。

カフスは既に外され、サイドテーブルに置いてあつたから、行動も早かつた。

洗面器に張られたお湯にタオルを浸し、固く絞り、腕を優しく拭いてくれる。

「その指輪、持つてたんだな。」

「え、ええ。」

「どうりでな・・・。探してもなかつたはずだ・・・。」

静かな病室、静かな口調での会話。
でもそれが心地よかつた。

この指輪は初めて貰つたものだつた。

結婚指輪はダメでも、これなら赦されるだろうと、あの日、ひとつそりと荷物の中に忍び込ませたのは、私の微かな未練と醜い感情。

素直になれなくて、だけどころだけはと。

ちつとも豪華ではないけれど、单なるチヨーリップの華が纖細に彫られた細い指輪だけど。

「初めて逢った時に貰つたものだから……」

「……、吉乃の好みも知らない時に贈つたモノだからな。だから、気に入つて貰えるか判らなくて、苦労もした。」

智曰く、記念日には私に何かを贈りたいと思つていたらしい。けど、私が何も言わず、会話もせず、話し掛ける事も出来ず、花を贈る事しか出来なかつたらし。

そう言われてみれば、良くな束を持って帰つてきていた。

(なんだ・・・。)

今思えば、それが不器用な智らしい愛情だと、素直に理解出来、受け取れる。

クスクスと笑つてゐると、プチンと、ブラジャーのフロントホックが外された音がした。

「吉乃是着痩せするタイプだつたんだな。知らなかつた。」

(なつ!-!-)

淡々と身体を拭いていく智は、さうつとそんな事を言つ。

私は平静を装いながら、言い返した。

「き、着痩せつて。それほど大きくな……。たつたのBだし……。

」

「胸がデカイだけの女は好みじゃない。」

こんな状況で交わす会話は、なんだかとても気恥かしい。

恥ずかしくて顔を伏せてしまった私は、その痛みに吃驚した。

首筋、項、右耳の後ろにチクリと走る痛み。
思わず、吐息が漏れる。

「んあっ・・・、イア・・・、フう。」

その痛みは、決して痛いだけじゃない、甘い痛み。

耳元で濡れた音がし、左耳を甘噛みされた途端、私の身体は素直になつていた。

「ふあ・・・、あっ・・・。」

クスリ、と、愉悦に染まつた智の笑い声。

「吉乃は本当に耳が弱いな。」

撫でられている背中が、腹部が、むず痒くて熱い様な気がするのは、きっと氣のせいじゃない。

ゾクゾクしたり、疼いたりするのも、触れている人が好きな相手だから。

ふるふると快感に震えていた私は、自分でも気付かない内に、快感に蕩けた表情を浮かべていた。

それに気付いたのは、智の苦笑交じりの言葉が聞こえたから。

「今は誘うな。ほら、新しい着替えだ。」

そつちが仕掛けってきたクセにと、潤んだ瞳で智を睨みながら、着替えを受け取り、身に着けた。

火照る身体に、新しい病衣はさらりとしていて心地よかつた。

人心地つき、気を緩めていた私は、智の手が下半身に伸びている事に気付かなかつた。

気付いた時には、どうやつたのか、ズボンが脱がされ、温かいタオルで拭かれていた。

「や、恥ずかしい……っ。ヤメテ……っ」

脚を拭かれる事が、こんなに恥ずかしい事とは思わなかつたし、知らなかつた。

（今なら、恥ずかしさで死ねる。）

今、私の脚を持ち上げ、拭いている手は、普段は多くの従業員とその家族の生活を支え、守る為に、パソコンや万年筆、何ヶ国もの色々な新聞のページを括っているモノ。

ふいに、その手が止まり、僅かに震えた。

「吉乃、手術で治るとしたら、お前は受けてくれるか……？」

不安に彩られた智の声音に、私は何も言えなかつた。

「どうして、お前だつたんだろうな、吉乃・・・。」

その小さな呟きを聞いて、私は決意した筈だつた。

一度と貴方を悲しませたり、傷つけたり、一人にしないと。
なのに、それを私は破つてしまつた。

ごめんね、智。

、10 姑・やくらの策略（後書き）

ギリ、18禁じゃ、ないですよね？

ああ、むず痒かった。

こんなシーンは、一度とめんだ。

、
11 治癒？（前書き）

この回から2章になります。

、11 治癒？

「貴女は助かりますよ、手術さえ受けねばね。」

雨が霧のように降る、六月の中旬のとある日。

私はここ一週間の間に、もはや日課に成りつつあった、加賀見先生と智と私の三人でのメンタルケアを含めた面談を終えた後、「病気の事で話があるから」と、内科の担当の先生に、病室に戻る為にゆっくりと歩いている所を呼び止められた。

その時、私は病室まであと500Mという所にいた。

入院してからの私は、何も気力が湧くはずも無く、動く事をあまりしなかつたせいか、身体の筋力は、著しく低下していた。

それを改善し、体力を取り戻すため、リハビリを兼ねた歩行訓練中に話しかけられ、私は側にいた一人に相談した末、話を聞くことにした。

入院してから、毎日体調を見ながら続いている点滴。

その点滴を下げる台の車輪をカラカラと転がしながら、先生に案内されるまま、小さいスクーリング室に、加賀見先生と智、そして私と内科の先生の四人は入り、椅子に座った。

先生は椅子に座るなり、首から下げていたPHSを取り、どこかにかけ、一言・三言話し、「では、お願ひします」と、通話を切り上げた。そして、5分後、現れた先生がなんの前振りも無く、初頭の言葉を私に言った。

「信じられませんか？でも、貴女は死はない。貴女は進行性の胃癌ではなく、普通の胃癌です。間違はありません。」

あまりにも急な事に、放心しかけていた私は、智が背中を撫でてくれた事で落ち着き、まじまじと先生の顔を見て、先生が頷くのを見て、詰めていた息を吐きだした。

どうやら、私は死なないらしいことこのまゝ、本当の事らしい。

（いついつのつて、何て言つんだつけ？青天の霹靂？）

私がまだ話が聞ける状態ではないと見たのか、先生は智に私の家族であるかを確認し、今回の大まかなあらましを説明してくれた。

先生によれば、まず、スキルス胃癌と診断されたのには、病院側のミスだと説明があり、さらにそのミスは、大病院であってもなくとも、絶対あつてはならない取り違いミスで、私のレントゲン画像と血液が、他の患者のものと取り違えられ、そのまま誰も気付くことも無く、それぞれそのまま病名を宣告されたらしい。

その間違いに気付き、指摘したのは、まだ27歳の若き研修医だったといつ。

「胃癌だつたと言つだけで、今も貴女の身体の中には病巣が根づいてます。近々それを取り出せば、再発の可能性や、転移の可能性は減るでしょう。」

受けますか？と、その道の名医である先生が私に聞き質す前に、智は動いていた。

加賀見先生も、是非にと、頷いていた。

勿論、その話を聞いた綾橋の家族（智が電話で知らせた。）は、迷うことなく即答した。

手術を受けるのは、あくまで私。

なのに、その当の本人の意見も聞かない内に、智や綾橋の家族は、その名医である先生に手術を依頼してしまった。

「愛されてますね。」

「」にこと微笑むその先生は、本来、半年ぶりに休息するために来日（帰国）したというのに、私を見た瞬間、自分は何処まで行つても、つづづく医者なのだと自覚したらしい。

「これも何かの縁だよね。君は私の最初の妻に似ていてね。どうしても助けたいんだ。だから一緒に頑張って、元気になろう。」

（ズルイ。）

そんな事を言われては、誰だって断る事は出来ない。

懇願されるような、子犬みたいな瞳で見つめられた私は、薄い微笑を唇に浮かせた。

、
11 治癒？（後書き）

疲れたので、続きは後日、日を改めて。

、12 治癒？（前書き）

更新しました。

、12 治癒？

私の薄い微笑みを見て、先生は何を思ったのか、「少し良いかな」と言つて、スーツの内ポケットから、パスケースと万年筆を取りだした。

パスケースは何年も使っているのか、あちこちに綻びがあり、所によつては擦り切れているところがある、年代物を感じさせるものだつた。先生はそのパスケースを開くと、普段からそこに入れてくれるのだろう写真を取り出し、私に見るよつて言つた。

その写真を受け取り、私が息をのんだのを見て取ると、先生は昔の記憶を思い出すかのように、瞳を閉じた。

「似てるだろ？きっと、私の娘が生きていたら、多分君みたいに可愛くて、優しい子に育つていただろうね。」

(生きいたら、つて)

先生 - 建川芳寛たてかわ よしひろ、56歳と名乗った男性 - は、私の困惑を肌で感じ取つたのだろう。

苦い何かを呑む込むかのように、顔を歪め、苦笑を洟らした。

多分、最初の奥さんと子供の事を思い出していたのだろう。辛そうに歪められた表情が、それを物語つている。

部屋は妙な静けさに支配されていた。

建川先生は、その微妙な空気を払う様に、重い口を開いた。

「香也乃、ああ、死んだ妻の事だけどね、彼女も今の君と同じ歳で死んでしまってね。元々、身体が弱かったのに、どうしても子供を産みたって強情でね。多分、彼女は寂しくて仕方なかつたんだと思う。その時の私は、彼女の様子の変化に気付かないくらい、毎日が忙しかつた。元氣だつたから、いつも穏やかに笑つてくれたから、彼女の変化に気付けなかつた。」

先生の過去の過ちを懺悔する様な独白は、誰にも止められなかつた。

「彼女は、中絶が出来なくなるまで私に妊娠の事実を隠して、出産した。彼女が命を掛けて産んだ子。その子さえ私は守れなかつた。娘は生まれて一時間後、息を引き取つてしまつた。彼女はそのショックが耐えきれなかつたんだろうね。彼女も、香也乃も、私を残して、娘の死を追う様に死んでしまつた。丁度、中秋の名月、十五夜の日の、綺麗な満月の夜だつた。」

今でも、香也乃さんの最期の悲痛な謝罪の声が聴こえると、先生は万年筆を手の中で弄びながら、誰に言つ訳でもなく、小さく呟いた。

先生の顔を見れば、表情や瞳を見れば、今でも香也乃さんが好きだと、忘れられないのだと判つたし、雄弁に語つていた。

私と智、加賀見先生、そして建川先生と内科医の先生の五人がいる部屋は、建川先生の懺悔にも近い独白が終わつても尚、静寂に支配されていた。

でも、私は心の奥で警鐘が響いているのを聞いていた。

(聞いちゃいけない、これ以上、聴いちゃつたら……)

心はそう必死に叫んでいるのに、頭のどこかが、本能なのだろうか、私はもつと話が聞きたいと強く願っていた。

どうしてかなんて、解らない。

ただ一つ判り、感じるのは、建川先生が私の中に、ある感情を感じさせ、植え付けた事。

カルテを読んだのだろう。建川先生は私の目を見て、強く、はつきり言った。

「綾橋 吉乃さん、君の誕生日は娘の誕生日であると同時に、私の妻と娘の命日もある。それに君は妻に生き[写]しだ。絶対に助けるから、生きる事を諦めないでくれないか」

他人には思えないんだよ。と、言ひ言葉で、私は、古い[写真]と先生を見比べ、彼が言いたい事を理解した。

私は生きる事を半分くらい、どこか諦めている所がある。建川先生はそれを見抜き、柔らかに指摘した。

昔から密かに抱いている心の違和感と疎外感、そして、……。

[写真]に田を移し、[写真]の中の彼女に問い合わせてみる。

(私は生きていても良いの?)

そう問い合わせた時、田の錯覚だとは思つが、笑いかけてくれたような気がした。

頑張つて・・・、私の可愛い・・・。

それだけで私は、生きてみよつと決めた。きっとそれが今の私の選ぶ道なのだからと。

私は建川先生を正面から見据え、深々と頭を下げた。

*

三日後、私の手術は秘密裏で行われた。

秘密裏に、と言つても、私が入院している病院の先生達は、中々こんなチャンスは無いと、やれ記憶しようと、手伝わせろ、見学させてくれだのと言い争い、私の身体を使って実験しよつとした。

もう、どうせ末期で助からぬのだから、と。

それを聞いた建川先生と智、もちろん加賀見先生もそれを許すはず無く、激しく非難し、守ってくれた。

「医師は、時として残忍な科学者や研究員になつてしまつ。自分達がどうしてこの道に入ったのかさえ忘れてしまつくらい。」

（哀しい事だと、情けないことだと、野仲先生（私の内科の担当医）は、言った。

また、それはとても怖く、患者側家族にとつては、理解できないものだとも。

手術室に搬入される前、ストレッチャーの上に寝かせられ、移動していた私の手を握り、智は私に声を掛けてくれた。

「吉乃、頑張ってくれ。」

短いけれど、願いと思いが詰まつた言葉。

その言葉に領き、私は8時間にも及ぶ大手術に臨んだ。

結果は成功。

私の中に巣くっていた病巣は、見事綺麗に切除された。

手術が終わつた後、私は集中治療室に入れられ、10日間、意識を戻す事無く眠り続けた。

手術が長引いた大きな要因は、出血量が多く、患部が非常に難しい所にあつたからだと、後で教えられた。

そこはとても微妙なところで、一ミリでも違うところを傷つければ、死に繋がる失敗になるほどの困難な所だと。

とは言え、それは成功したからこそ言える言葉で、聽ける真実。

それより私の興味が強く惹かれたのは、10日間の眠りから覚めた瞬間、薫ってきた色々な花の香りと、日に飛び込んできた贈り物の数々。

そして驚いたのは、建川先生の不安そうな表情と、智の憔悴した
というより、疲弊した顔。

「どうしたの？疲れてるの？」

自分で思っている声より、若干掠れている声に、眉を顰めそうになつた。

酸素マスクも邪魔だ。

そんな私の百面相を嬉しそうに建川先生は見ながら、智の肩に触れた。

「良かつた。智君も良かつたね。これでもう安心しても良いから、
休みなさい。」

労るような建川先生の視線と口調に、智は気まずげに顔を俯かせた。

その行動は、少し子供じみていた。

（か、可愛い、と、思っちゃいけないわよね！？）

笑い出したいのを堪え、無理矢理言葉を捻り出す。

「大丈夫？顔色、悪いわよ。会社は？仕事は？」

私の頬を言葉なく撫でる智の手の上に、私の手を重ね、問い合わせる。

私が見ても疲れているのが見て取れるのに、智は手を離さうと

しない。

どうこうことだと、建川先生に説明を求めるよつて田をやれば、建川先生は苦笑しつつも教えてくれた。

「吉乃さんが心配だつたらしくてね、10日間も目を覚まさなかつたり、心肺停止も何度かあつてね。智君は見ていても可哀想なくらいだつたよ。もし吉乃さんが今日あたり目覚めなかつたら、智君は発狂していたかもね。眠るのも怖くて、夜が来るたび言い様のない恐怖に駆られて。」

とても仕事なんか出来るような心理状況になんかなれませんよ。と、言つて更に。

「愛されてますね、吉乃さん。」

面映ゆくなる建川先生の言葉に素直に頷き、私は今の想いを言葉にした。

「はい。私も同じです。たつた一人の、特別な人です。いつか、子供も欲しいです。」

その前に、避妊治療もしなければならないが、それは追々やっていけばいいだろうと、その時の私は、安易に思つていた。

その時、ぽたり、と熱い雫が手に落ちてきて、私は視線を智に戻した。

(え!?)

見た物が信じられなかつた。

自分で自分の目を疑い、夢かとさえ疑つた。それ以外、何も思い浮かばなかつた。

勿論、智も人間だから涙線も感情もある。

それでも智は、普段は表情を変えない。

その智が泣いている。

私が知つてゐる智は、あくまでも背筋を伸ばし、自信に満ち溢れ、多少傲慢で、常に会社第一主義の人だから。

今では優しい所もあると分かつてゐるけど、先に植え付けられたイメージは健在で。

何とか元に戻つて欲しくて、私の口は、石鹼水に洗い流されたのかと疑われるくらい、破廉恥な言葉がすらすらと出ていた。

「私が退院したら、やりなおして。もつ私が悲しまないようにな、たくさん愛して。智の唯一無一の女として、永遠に。」

だから、今の内に休んで。と。

意識して未だに私の頬に置かれている智の手を、ギュッと強く握り、微笑んだ。

私の言いたい事を、伝えたい事を理解してくれたのか、智は艶やかな笑みを浮かべた。

そして、耳に囁かれた言葉は、私の顔を瞬時に染めさせる言葉だった。

三年分、寝る間もないほど愛してやる。今之内、体力作つて
おけ・・・。

建川先生は聞こえていただろうに、素知らぬフリをしてくれ、た
だただ、嬉しそうにニコニコしていた。

そして時は流れ、2週間後。

私は無事に退院の日を迎えた。その私の隣には、私が好きな凛々
しい智がいた。

、12 治癒？（後書き）

長かったら、「めんなさい。」

、13 義姫とお茶と・・・（前書き）

利依、
再び

、13 義姉とお茶と・・・。

義姉さんが退院して、綾橋の本宅で一緒に暮らし始め、早いものでもう一ヶ月。

最初こそ、あちこちにいる使用人に臆していたり、遠慮していた義姉さんも、最近では随分と打ち解け、たまに冗談を言い合つたりしている。

力チリ。

微かな陶磁器の触れあう音に、お父様とお母様のスケジュール帳から（私の仕事は、お父様の第一秘書兼、お母様のアシスタント）、その音の正体の方へ注意を向ければ、温かな湯気を立たせた白磁のカップが、ガラス製のローテーブルに置かれたところだった。

カップは白く滑らかで、金色で縁取られただけの、見た目より实用性を重視して作られたもので、アンティーク品ではない。そのカップの中は、ストレートのセイロンティー。

「冷めない内に、どうぞ。」

「ありがとうございます、義姉さん」

持つて来てくれたのは義姉さん。

義姉さんは病気療養といつも田舎で会社を休養中で（お父様の権力をここぞとばかり駆使させて貰つた。）、折を見て復職する方向でいるみたい。

その義姉さんの淹れてくれる紅茶は、そこのうの下手な喫茶店のものより、数万倍美味しい。

そう感じるのは、どうやら私だけではないらしく、お母様やお父様、当然兄さんもそう感じるらしく、家族で寛ぐ時は、専ら義姉さんが淹れてくれている。

冷めない内に、と、義姉さんは言つてくれているけど、実際は私がちょうどよく飲める温度で淹れてくれている事は、割と早い内から気付いていた。その心遣いが温かく、また、嬉しくて。だから一も二もなく、仕事よりお茶を優先する。

(ああ、今日も美味しい・・・。)

クセがあるから、好きか嫌いかで好みが分かれるセイロンティー。

ふくふくとした気分で、お茶の香りと味を楽しんでいると、義姉さんの格好が目に入った。

今日の義姉さんの服装は、ノースリブの黒いワンピースの上に、レースのカーディガン。

その隙間から見えた、紅い華の痕。

(元、兄さんったら・・・!...)

異常とも、執拗とまで言える独占欲と執着心。それを外聞なく見せつける兄さん。

義姉さんは、兄さんに愛されてるという充実感と実感で、元々綺

麗だった義姉さんは、更に綺麗になつた気がする。

「利依さん、どうしたの？私、どこかおかしい？」

「いいえ？義姉さんは何処もおかしくないわ。おかしいのは兄さんの方だから。」

（そうよ、おかしいわ。）

（うう）とばかり、私は義姉さん相手に愚痴や不満を言い募らせる。義姉さんには悪いけど、あの兄さんのどこが良くて結婚したのか判らない。

同じ男でも、従兄の紘人さんの方が、断然カッコよくて、完璧だと思うのに。

（まあ、弁護士になつてからは、全然逢えてないけど。）

そんな私に、義姉さんは頬を紅く染め、ふふふと笑い、紅い唇に左手の人差し指を近づけ、悪戯っぽく言つた。

「それは、内緒。言えないわ。」

そう言つて、あつけなく私を軽くあしらつた義姉さんは、今度はむずむず、もじもじと、身体を動かし、視線を彷徨わせ始めた。

（兄さん、ごめんなさい・・・。）

私は兄さんが義姉さんを独占したい気持ちが、今良くなつた。

所々プライドの高い仕草や口調。それだけの女なら、何処にでも転がっている。でも、義姉さんはその中にも成長しきれていない、幼さと言つか、弱さが見え隠れしていて、守りたくなってしまう。私が男だったら、兄さんより先に結婚を申し込んでいたと思う。

そんな私の様子に気づく事も無く、義姉さんは、「あの、ね？お願いがあるんだけど聞いて貰える？」と、顔を真っ赤に染め、私に聞いてきた。

もう、お茶なんか飲んでる場合ではない。

無意識に義姉さんが放つ、妖艶な色気をまともに喰らつた私は、もう義姉さんの虜だつた。

激しく頷いた私に、義姉さんは嬉しそうに微笑み、口を綻ばせた。「あの、ね？私の事、名前で呼んでくれないかしら。なんだか、距離があるみたいで寂しいの」

カップをテーブルに戻しておいて良かつたと思ひ。恥じらいながら、照れつつお願いする義姉さんは、世界で一番可愛い。

（なんて可愛いのー！義姉さん、いえ、私の姉さんの吉乃はー！）

トクトクと高鳴る鼓動は、間違いなく私が吉乃を愛してるから。（間違つても変な意味じやない。親愛の方の愛情だから。）

その瞳と表情はヤメタ方が良いと思ひ。犯罪級に可愛いから。

私の答えを今か今かと待つてゐる吉乃。

私はハグをしたいのを腕を組む」と我慢し、についつと笑つて頷いた。

「いいわ。判つたわ。吉乃。それより、その、凄いわね。そのキスマーク」

兄さんの相手、大変なんじやないの？

すっかり冷めてしまつたお茶を飲みつつ、吉乃に聞けば、吉乃はあからさまにうろたえ出した。

「う、そ、そんな事……。」

「昨日は何回したのかしら？中々静にならなかつたけど？」

「き、聞こえてたの！？利依さん！？」

慌てふためく吉乃に、私は微笑むだけ。

そんな私を見て、吉乃は「あー」だの、「うー」だのと唸りつつ、紅茶のカップに角砂糖を次々と放り込んだ。

勿論、声は聞こえなかつた。聞こえるはずがない。なぜなら、兄さん夫婦がいつも同居しても良い様に、兄さん夫婦の寝室は、元々完全防音で作つてあつたから。

それをわざわざ教えてあげるほど、私は人は良くない。

それに、今や兄さん夫婦の夫婦事情は、我が家の最大関心事の一つでもある。

けど、回数や頻度は、单なる私の興味。

吉乃是「秘密ですよ？」と言つてから、手を開いた。

それは回数を表し、寝たのは朝方だったと、白状した。

（兄さん・・・。）

涙が出てしつづいた。

あの兄さんが、ようやく此処までと。そして、同時に、また『吉乃』と言つ女性の特別さも、私はこの時、理解した。

兄さんがまた壊れる時があれば、それは一人が離れた時。

でも、そんなことは起きないだらうと、私は安易に思つていた。

漸く訪れた幸せで、温かな日々。
自然と頬が緩む。

吉乃が入院していると発覚するまでの日々と、お見舞いに行くまでにかかった日々と比べるまでもない、幸福感に溢れた今の我が家。

兄さんは明日会社を丸々一日休み、吉乃とテーートする予定。

まるで漫画を読んでいるかのような二人の関係だけど、兄さんの精神状態は不安定のまま。今でも睡眠薬を手放せないし、吉乃の姿が見えないだけで、顔色が変わる。

離婚寸前というか（実際は未入籍だった）、縁が切れてしまう寸

前だったから、それは仕方ないとは思つ。

吉乃もそれを解つてゐるのか、常に氣を配つてゐる。

「明日の兄さんとの『テー』ト、楽しんできてね」

「ありがと、利依さん。」

幸せそつこ、本当に幸せそつこ、嬉しそつこ微笑む吉乃。それに私も嬉しくなつて笑つた。

でも、この時。

もし私が一人を、吉乃を止めていたら、違う未来が待つていたのかもしれない。

神様はどうして兄さんや吉乃の一人だけに、苦しみや残酷な試練や、冷酷な仕打ちを下えるのだろう。

この後に起つる、綾橋家の最大の危機を呼び込む、波乱の種が芽吹いてるとは知らず、私は悠長に年下の姉・吉乃と、会話を楽しみながら、午後のお茶の一時を楽しんでいた。

空は、明日からの未来を示すように、雨雲が空を覆い、冷たい雨がふり、夜遅くまで、雷も激しく鳴り響いていた。

、13 義姫とお茶と・・・（後編）

れど、次回からこなこよ動を出しまくる。

、14 真夏の日の悪夢？（前書き）

さて、これからはしばらくシリアス路線がメインテーマです。
お許しください。

人生はそう甘くはありませんので。

、14 真夏の日の悪夢？

8月10日、水曜日。

空に雲の一つも浮いていない、良く晴れた日。

この日が、私が生涯忘れる事が出来ない、これから騒動の幕開けになる日になるなんて、一体、誰が予想できただろう。

私は類と付き合っていた頃から、あまりデートの行き先は気にしない方だった。

ただ、一緒にいられれば幸せで、嬉しくて、行き先なんか関係なかつた。だから、たまに何処に行きたいかと聞かれ、尋ねられた時は、困惑して何も答えられなくて、あやふやに笑って誤魔化していた。類もそんな私の性格を熟知していたから（類と私は幼馴染だった）、雑誌の「デートコース」を忠実に守ったり、何もしない日もあつた。

「吉乃、新しい靴はいらないのか？」

智が選んだ「デート先は某有名デパートで、いわゆる買い物デート」だった。

今日の私は、髪を左サイドにまとめて流し、六分丈の白いチュニックワンピースに、ジーンズの生地で出来たレギンスに、五センチのヒールのサンダルという控えめな服装で、智はカジュアルなパンツとジャケットというスタイルで、デパートに来ているお客さんの視線を一人占めしている。

私がボンヤリとそんな事を思いながら、靴売り場を見ていると、

それに気付いた智が、靴売り場の前で足を止め、私の足下を見て、私の返事を聞かない内から靴売り場の椅子に座らせ、何足かの靴を店員に持つて来させた。

実を言えば、丁度新しい靴が欲しかった私は、智のその気遣いが嬉しくて、感激したのと同時に、愛しくも思った。

私が座つたのとほぼ同時に置かれたのは、三足の靴。

パンプスにハイヒール、そして何故かスニーカー。

それらを手すから試足させ、さっそく会計を済ませた智は、無表情ながらも満足気に見えた。

「何もこんなに買ってくれなくとも・・・。私だってお金はあるんだし・・・。でも、ありがとう。嬉しい。」

私が今履いている靴も、実は智が買ってくれたモノ。そればかりか、今、私が身につけているもの全てが、智が買ってくれたモノ。

「あとは鞄とスーツか？体調が良ければ、来週から会社に復帰したいんだろう？」

紳人から聞いたぞ、と、少しだけ不愉快そうに顔を歪め、私をジロリと睨んだ智に、私は苦笑した。

(そんな顔しなくても良いのに・・・)

弁護士の紳人さんは、あれから縁が切れることがなく、継続的に色々仲良くさせてもらっている。

今では雇用関係だけではなく、個人的に親しかったりもする。

（そう言えば紗人さんって、好きなヒトがいるのよね。利依さん、知ってるかしら？）

くふふふ、と、妖しげに何かを企むように笑っている私の傍らで、智は怪訝そうに私を見ながらも、鞄売り場を探していた。

そんな私達の間に、これから嵐を巻き起こすであろう波乱の使者が、静かに、しかし、確実に近付いていた事に、私と智は気付いていなかった。

、14 真夏の田の悪夢？（後書き）

「夏の風」と題していた原作の話の2ページ田まではですが、修正して更新しました。

この回の話から、地味に色々手直しが入ります。

少しうれしくお願いします。

、15 真夏の田の懸念（漫畫也）

昨日の続々。

災厄は、人が忘れた頃に訪れると、あの人気が言つていた・・・。
靴と鞄、スーツの全てを買い終え、次はどうしようかと相談していた時、その声は、私と智の仲を引き裂き、割り込むように聞こえてきた。

「智？智じやない？久しぶりね。」

ふわりと漂う甘い香水の匂いに、美しさと知性を窺わせる声に、私は嫌な予感に胸を震わせた。

（やめて・・・、やめてっ！）

だけど、その願いは全く聞き届けられなかつた。
まるでそれは予めそなる様に仕組まれ、定められていたかのように。

（どうして、どうしてなの！？）

虚ろになつていいく私の視界と聽覚に、その可愛らしい顔と声が聴こえて来たのはその時。

「ママ？そのひと、だあれ？」

ちよこりと、首を傾げ、女人を見上げる女の子の顔は、誰かに、
智に似ていた。

女の人は女の子の問い合わせに答える事無く、にっこりと微笑み、智の横に立つていて私の眇めた瞳で見て、一瞬だけ唇をいびつな形に歪めた。

智はそれに気付く事無く、女人を驚愕の表情で見て、そして掠れた声で、名前を呼んだ。

「万季……か？」

その声色は、色々な感情が渦巻いていた。

だけど私はそんな事より、智がその女人の名前を呼び捨てているのが、何よりも許せなく、信じられなく、信じたくなかつた。

智に万季と呼ばれた女性は、智に名前を呼ばれた事に満足したのか、智の問い合わせに頷き、女の子を引き寄せ、挨拶をするよつて促した。

女の子がその時、少しだけ痛そうに顔を歪めた事を、私は自分の事でいっぱいになつていて、見逃してしまつていた。

女の子は、私と智を交互に見て、頭をペコリと下げた。

「はじめまして、たちばな まな 4歳です。」

はつきりとした、でもその舌つたらずな甘い声も、何処か智に似通つていた。

考えたくない、信じたくないという私の心とは逆に、私の五感は残酷にも正常に機能する。

「久しぶりね、智。相変わらず無愛想なのね。」

親しげに会話する智と女のヒト。

女の子は、そんな一人を見て、嬉しそうに微笑んでいる。

智は小さな女の子の顔を見て、信じられないといつ声で、また、女の人へ声を掛けた。

「万季、この子供は、もしかして・・・。」

「あらやだ、判っちゃた？ そうよ、万菜は私と智、貴方の子よ。」

「口口口口と笑いながら、私を見下すような視線で眺めまわし、語った言葉に、発せられた言葉に、私は一瞬にして暗闇へと突き落した。

女の子は、私の方をちらりと見て、それから母親を見て、僅かに怯んだ表情をのぞかせた後、それまでの表情を覆い隠すように満面の笑顔を浮かべ、「パパ！」と、智に抱きついた。

それを見ていた他のお客さん達は、そんな三人を理想の夫婦だと、羨望の籠つた声音と視線で羨んだ。

「見て。あの美男美女の夫婦。お似合いよね。女の子も両親に似ていて綺麗だし」

その囁きに、私の心は悲鳴を上げ、歎哭をあげた。

(やめて・・・やめてっ！…)

だけど私のその悲痛な慟哭は誰にも届く事無く、残酷にも時間は勝手に進んでいく。

つい先程までは楽しかった。

楽しくて、嬉しくて、幸せで、心がふわふわで、温かくて。

なのに今は寒くて、辛くて、悲しくて。

どうにもならない孤独感と私の心の中の闇が、静に私を狂わせていく。

(「に、いたくない・・・誰か、助けて。」)

智、私を見て、と、言いたかった。

でも、この時からひつそりと狂い始めていた私の心は、それを許さず、気がつけば一人でテパートを出て、ふらふらと歩き、綾橋の家に戻っていた。

別れと崩壊の時が静に近づいていた事を、この時の私は、何処かで予知していたかも知れない。

、15 真夏の日の悪夢？（後書き）

やれやれ、何とか更新出来ましたよ。

、16 心の鍵？（前書き）

更新。

どうして幸せな時間は続かないのだろう。

頭と心の中を駆け巡り、恐ろしい程の速さで蝕んでいくのは、醜い想いと感情。

物分かりのよい妻として、理解のある妻として、智が他の女といった事も問い合わせたりせず、智が自分から話してくれるまで待とうと決め、受け入れたのに。

智の過去に何があるのとも拘らない、構わない、と思っていたのに。

けれど、それは私の痩せ我慢と虚勢、醜い心を隠すためのプライドだった。

私はいつの間に、こんなにも嫉妬深い女に成り下がっていたのだろ。類の時でさえこんなには苦しまなかつたし、心は乱れなかつた。

(どうして、どうして、どうしてなの、智！…)

考えても、譬え自問自答を繰り返した所でも、答えが出たり、返ってくるわけではない事は理解している。それでもそれをやめられない。

鞄をソファーに放り投げ、大きなベッドにうつと横になり、身体を猫のように丸める。

普段使われていない密室のベットは、いきなりの重力で驚いたのか、ギシッ、と、軋む音を立てた。

私はそれに構うことなく、田を閉じた。

田を閉じれば思い出すのは、あの光景。あの光景がどうしても田に焼きつき、思い出したくもないのに、勝手に思い出す。

それが苦しくて、悔しくて、切なくて、変になりそうだった。

幸せそうで、お似合いの夫婦で、家族。

(あの子、まなちゃんも、可愛かつた……。)

悶々とした気分のまま、私はずっとそうして横になつていて、いつの間にか眠り込んでしまっていた。そうと判つたのは、誰かに身体を揺さぶられていてから。

私を起こそうとしている人は小柄なのか、手が小さかつた。もしかしたら子供かもしぬなかつた。

(この家に、子供はない……。)

私は子供という可能性を打ち消し、そろそろと薄い瞼を開けた。すると、そこにいたのは、見覚えのある小さな子で、何故か不安そういうにしていて、今にも泣き出てしまいそうな顔をしていた。

(名前は確か……。)

喉まで出かかっているのに、名前が中々するりと出てこない。

そんな私を、小さな女の子は、不安混じりの声で私の事を気遣つ

てくれた。

「よじのお姉ちゃん、だいじょーぶ？あやめのこと、わかる？」

（そうだった、あやめちゃんだった。）

細く、白い左手を伸ばし、あやめちゃんの真っ黒な艶々とした長い髪を優しく撫でる。

あやめちゃんは、紳士さんのお姉さんの子供で、良く綾橋の家に遊びに来る。と言つのも、咲田家が綾橋家の分家だから。

「おねえちゃん、ぐあいわるいの？おなか、いたいの？」

あやめちゃんの不安げな声や、眼差しは、素直に嬉しく感じられるし、申し訳なくも感じる。

（何やつてるの、相手は子供なのに。）

大人が子供に心配を掛けとはいいけない。いつでも守つてあげなくてはいけない、と、短大生時代に習つたし、現場でも教わった。

小さな子に心配を掛けたくないで、私はまた、無意識に心に仮面をつけ、力ちりと、心の鍵のダイヤルを回した。

「大丈夫よ、あやめちゃん。少し疲れて寝てただけだから。智お兄ちゃんには会つた？」

「うんっ！……いま、おふろにこなつてるよ？すゞくあせかいてて、ひとりでかえつてきたから、ママとりいちゃんにおこられてた。」

きっと、探してくれたんだろう。誰でもいきなりいなくなれば必死で探す。

探さない人がいるとすれば、最初からその人に對し、何ら感情を抱いていいか、捨てる事を決めているかだ。

(嫌気がさすわ。)

心配すると知りつつ、浅はかな行動をとってしまった自分が嫌になる。

「おねえちゃん、ママがおねえちゃんをおはなししたいんだって。りこちゃんもまってるよ?」

血口嫌悪に駆られている私の指を、あやめちゃんはその小さな手できゅっと握り、私の顔を見つめた。

そのあやめちゃんの瞳は、いつの間にか涙で潤んでいて、私はまた申し訳なく感じた。

私はそれを何とかしたくて、身体を起こして、ベットから降り、軽く身繕いしながら、私は明るく言った。

「じゃあ行こうか。お腹もすいたし。あやめちゃんはい飯食べた?」

あやめちゃんの小さな手と手を繋ぎ、一步一步、階段をゆっくり降り、リビングに着いた私とあやめちゃんは、そこでお風呂から上がったばかりの智と鉢合させした。

ついさっきまで後ろめたく感じていたのに、智の顔を見た途端、
私の心はまた静かに、私が知らない内に、力チリ、力チリと、ダイ
ヤルを回し始め、頑なになり始めていた。

、16 心の鍵？（後書き）

変な所ですが、ここで区切れます。

、17 心の鍵？（前書き）

更新します。

、17 心の鍵？

「お帰り。」めんね、先に帰っちゃって。」

「こりと微笑んで見せたのは、妻として、女としての余裕とくだらないプライドを智に見せつけるためと、自分の心を守るため。

今日の事は何も気にしてない。そりやって笑つて見せれば、誰も私の笑顔を疑つたりなんかしない。

私が長年を経て作り上げた完璧な笑顔の裏に隠された真実を見抜ける人は、誰もいない。勿論、智も簡単に騙された。

「いや、無事なら良い。」

髪から滴る水滴をタオルでガシガシと強く拭き取りながら、いつもより低めの声でそつけなく返事が返ってくる。

その濡れた髪を拭う動作を見て、嫌悪感を感じてしまったのは、あの女のせい。

チリッ と、心が焼けるような痛みに囚われ掛けていた私を、現実に引き戻してくれたのは、いつの間にか私と手を離し、ダイニングテーブルの椅子に座っていた小さな天使だった。

「おねえちゃん、はやくはやく。」

両手にナイフとフォークを持って、私にこにこにここと微笑むあやめちゃんは、私の葛藤や、大人の勝手な都合も、何も知らない。だが

ら救われる時もあれば、逆に疎ましく感じ得る時もある。

果てして今はどちらだろつかと、どうでもこい事を考へていた私の耳に飛び込んできたのは、楽しそうな女性の声だった。

「あやめは本当に西乃ちやんが好きなのねえ~。」

ワイングラスを持つてクスクスと上品に微笑むのは、あやめちやんのお母さん。

あやめちゃんは、その人に満面の笑みを向けた。

「うふ。あやめはママのつまむねえちやんがすき~。おねえちやんは、だれがじぱんすき~。」

悪意がないからこそ、この手の質問には答えにくい。だけど、この手の答えはある一言で解決できる。だから、私はその答えをする口と出した。

「ありがとう。私もあやめちやんが好きよ。」

けれど、あやめちゃんは誤魔化されてくれなかつた。あやめちゃんは、私が今、最も答え難い返事を要求してきた。

「じゃあ、わざわざこんなにこちやんは、なんばんめ?」

- - ズキッ - - -

じつして胸が痛んだのかは判らなかつた。

だけど、それを敢て言つなれば、その問いただされのいくつの恐怖だつたのもしれない。

あやめちゃんには、本当に悪意なんてないんだろう。

あるのは、純粹な好奇心と、好意だけ。

大人みたいに、下手な腹の探し合いや、駆け引き、騙し合いや悪意なんて必要ない。

だから、こんなにも無垢で、何でも言える。

「おねえちゃん、どうしてないてるの？」

中々答えられず、固まっていた私は、その言葉に我に返り、「泣いてない」と言おうとした。けど、その前に、私は傍にいた智に、胸元に抱き寄せられ、嗚咽を漏らし泣いていた。

（なんで泣いてるの？）

悔しいから？寂しいから？寒いから？

いいえ、違う。

答えは怖いからだ。

確かに今の私と智は、以前とは比べようもなく、夫婦としての仲は改善され、修復されている。だけど、まだ、私と智の間に子供はないし、授かる確率も低いまま。

綾橋の人は知らないのだろうけど、私は偶然聞いてしまい、知ってしまった。

病気になったのは仕方なく、私のせいでもない。だけど、あっち

の方は・・・。

その言葉を偶然聞いてしまった日から、私は、怖くて怖くて仕方がない。

不安は、いつ、いかなる時でも私を襲い、消えたりしない。

（「めんなさい」、「めんなさい」、「めんなさい」。役に立たない妻で嫁で。）

恐怖心と本音を曝け出す事も出来ない、弱い私は、泣いていた理由も言わずに、必死で笑顔を浮かべ、あやめちゃんの質問に答えた。

「私にとっての智お兄ちゃんは、自分より大切な人なの。代わりの人なんかいないくらい、大切で、ずっと傍にいたい人で、大好きな人。」

今は何も言えないけれど、いつかは全てを話し、受け入れて欲しい人。

（ねえ、神様。）

もし、本当にいて、私の我儘を聞いてくれるのなら、もう少し私に時間とを下さい。

永遠なんて求めないし、願わないから。

せめて、心の中から溢れるくらいの楽しさと、幸せな想い出を作れるだけの時を・・・。

それを叶えてくれるのなら、私は神であろうと、悪であろうと魂を売る。

そんな私の何かに感付いたのか、あやめちゃんが急に私に問いか

けてきた。

「おねえちゃん、しんだりなんか、しないよね？パパみたく、あわううになくならないよね？あやめをおいてかないよね？」

あやめちゃんの必死さは可哀想だけど、やがて訪れる終焉を変え事なんて、誰にもできない。その代わり、私は精一杯生きよつ。だから。

「あやめちゃん、今日はお姉ちゃんと智お兄ちゃんと、あやめちゃんの三人で寝よう。良いでしょ、智。」

涙を拭って、智に尋ねれば、智は声なく頷いてくれたけど、あやめちゃんは、私の急な申し出に驚いていた。

「おねえちゃん？」

オロオロと、びつしたらいいか、母親と私を見比べるあやめちゃん。

それでも、私は置みかけるように、あやめちゃんに頼みこんだ。
「お姉ちゃん、あやめちゃんみたいな可愛い子が、ずっと欲しかったの。だからお願ひ。今日だけお姉ちゃんと智お兄ちゃんの子供になつて？」

いくつかの本音と願いを口にして、あやめちゃんの必死な問い合わせる。
きっと、約束をしてしまつたら、あやめちゃんは悲しみだらうか逃げる。

全ては、あやめちゃんを傷つけない為。

そうして私はまた、間違った心の鍵を選んでいる事も気付かず、
夜じまれないよつて夜まで時を過いした。

、17 心の鍵？（後書き）

次回の話は、かなり変更になるかもしません。申し訳ありません。
でも、許してくれると嬉しいです。

、18 欠片を求めて？（前書き）

更新、
更新

、18 欠片を求めて？

私は限りなく卑怯で、意氣地がないのかもしない。

せりつ、せりつ。

深い眠りに付いている一人の髪を撫でる手を止め、窓辺に近付き、カーテンをそっと開けてみる。

まだ完全に夜は明けてはないけど、こればかりは仕方がない。

長い髪をポニーtailで一纏めにし、鞄を持ち、静に寝室を出る。

(「めんなさい、良い夢を・・・。）

今、私がこれからしようとしている事は、誰からも理解されないかもしれない。だけど、どうしても知りたいし、自分で決めた事だから、止められても出ていく。

時間が残っている間に知つておきたい、と言つより、後悔したくないから、今、動かなければならぬ。

足音を忍ばせ、玄関の鍵を開け、ひつそりと綾橋の家を出る。と、そこで、綾橋家が飼育している犬のドーベルマンが、私の気配を察知し、ムクリと頭をあげた。でも、私が唇の前で人差し指を立てるごとに、ふいと目を逸らし、尻尾を振つて見逃してくれた。

心の中で見逃してくれたスピネル（犬の名前）に感謝しながら、

一步、また一步と、歩を進める。

向かう先は決まつている。

入院中、意図せずして見て、知つてしまつた建川先生の前の奥さんの写真。

似ているというだけでは、決して済まされない顔だつた。

もう、戦う前から、真実を知る前から、戦わずして逃げるのは止めた。

だから私は確かに、逢いに行つてみようと、前から決めていた。それが今日になつてしまつたのは、少なからず昨日の暁の事が影響している。

あれだけ顔と雰囲気が似ているのであれば、と。

嫉妬と悲しみの中で芽生えたのは、動搖だけではなかつた。無性に知りたくなつてしまつたのだ。

私の母親は、一体どんな人だったのだろう、と。

菜々宮の家族と血が繋がつていないのは、過去にDNA鑑定で検査し、家族ではない事が立証された。

建川先生や智、綾橋の家族にはまだ伝えてはないけれど、私は密かに紹介さんに協力して貰い、先生の髪の毛を入手して貰い、DNA鑑定に2週間位前に出していた。その検査結果も、近々届くはず。

恐らく、十中八九建川先生は私の父親だらう。
残るは、彼女だけ・・・。

「待つていて、逢いに行くから・・・。」

私の独り言は、誰にも聞かれる事無く、夜明け前の空に吸い込まれ、消えていった。

*

建川先生の奥さんの御墓は、ひつそりとしていて、それでいて雑草や木の根、蔓や薙で覆われていて、荒れてい、整備されていかつた。

(どうして、こんなに荒れてるの・・・?)

建川先生のあの話振りからしてみても、このお墓の状況がそぐわない気がする。

腕を翳し、空を見上げ太陽は既に中天にある。

長野行きの新幹線の始発に乗れた所までは良かつた。

だけど私は半ば突発的に行動し、出てきたせいか、情報はあまり持つていなかつたし、こちらに知人もいる訳でもなかつた。

それでも、何とかこの墓地がある御寺に辿り着けたのは、入院中に度々お見舞いに来てくれた建川先生に、それとなく御墓のある場所を聞き出し、それを覚えていたから。

結果、市内を暫くウロウロした私は、駅前でタクシーを拾い、このお寺の名前を言つて乗せて来て貰つた。

私の右手には、タクシーに乗る前に買つた百合と菊の花束、そして左手には、水が入つた桶と、その水を汲む柄杓がそれぞれる。

荒れた墓を前にして、私はどうするべきか迷つた。

「のまま引き返すのもアレだが、掃除するにも道具がいる。一端、市内に引き返そつかと、思い直したその時。

「あら、珍しい。香也乃ちゃんの処にお客様なんて……。」

如何にも優しげで、穏やかそつな『婦人の、珍しげな声が聴こえ、私はその『婦人の方に目を向けた。

その『婦人は、私の意外と近くに立つていて、私が自分を見ている事に気付くと、ふんわりと微笑んだ。

そして。

「あらら、貴女、平さんの処の香也乃ちゃんにそつくりね。もしかして、香也乃ちゃんの親戚かお知り合い？」

香也乃ちゃん、平さん、と、親しげに言つて、問つてくる『婦人に、私はポロリと、まだ調べても、確かめてもないのに、想いを言葉にし、発していた。

「母です……ずっと探してた母です。その母の御墓がどうして…。」

どうしてこんなに荒れているのだろう。

誰にも見向きもされず、手入れもされておらず、墓石には苔が生

えてる所も見受けられる。

これでは朽ちてしまう寸前だ。

(酷い、これじゃあ可哀想過ぎる。)

人は二度死ぬと良く言つ。

一度目は命の灯が消えた時。

そして二度目が、人の心から消え去つてしまつた時。

ならば、香也乃さんは、私の母は、もう二度死んだことになる。

改めて墓を見て、そう思った時、私は近くに立っていた婦人に、躊躇う事なく、頭を下げていた。

、18 欠片を求めて？（後書き）

「」で一区切り。

、19 欠片を求めて？（前書き）

2回目)。

、19 欠片を求めて？

今年の夏は一段と熱い。

額から滝の様に流れる汗をタオルで拭いながら、溜息を吐けば、暑さが一段と増したような気がする。

「あつ・・・。」

お墓の掃除を始めて、なんだかんだでも「一時間が過りました」としている。なのにまだ終わりは見えてこない。

「一」精が出ますね。あつと身仏も貴女様に感謝しておられますよ。

熱さのあまり、木陰で一休みしようと大きな楠の蔭に入った私に、法衣を着た住職さんが冷たいお茶を出してくれた。

そのお茶をありがたく飲めば、爽やかな口当たりが美味しいほつじ茶だった。

「お若いのに感心ですね。あつとお母様も喜ばれると想っていますよ。」

「え・・・？」

「おや、貴女は香也乃さんと芳寛さんのお子さんでしょうか？」

違いますか？と、微笑まれ、私は困惑した。

私はそうであればいいと思つてゐるし、實際、願つてゐる。
でも・・・。

(どうして、解るの？断言できるの？)

今日初めて会つて、今、初めて会話しただけなのに。

きつと、そんな私の困惑を感じ取つたのだろう。お坊さんは穏やかに微笑み、細い目を更に細めた。

「貴女は本当に香也乃さんにそつくりだ。強情で、泣き虫で、だけど誰よりも強く、儂ぐ。自分の信念の為なら、愛する人を騙してまで、その物を手に入れる。いやいや、全く驚きました。」

嬉しそうに、それでも懐かしそう。

「これも何かの縁でしょ。これを引き取つては下さこませんか？」

そう言つて法衣の袂から差し出されたのは、一つのお守り袋と、紫水晶が付いた腕輪。

「これは？」と問えば、お坊さんは微笑みながら、「香也乃さんの遺品だ」と言つた。それをどうして私に？と、せりに問えば、自分が持つてるより、貴女が持つてる方が良いからと言われ、持たされてしまった。

「信じられないかとは思いますが、香也乃さんが私の夢枕に現れまして。どうか、これを渡して欲しいと。愛されてますね」

では、「無理をなさらずに、と、去つて行く姿は、まるでこれが

定められ、最初から決まっていた事だったかのような言動だった。

「私に残されたのは、古いお守り袋と腕輪の一いつと、お坊さんの言葉。」

暫くそれを茫然と眺めていた私は、風がさわさわと流れる音で我に返り、残りの作業をすべくタオルを首に巻いた。

＊

「コーン、と、田の前のテーブルに置かれたのは、温かい湯気を立ち上らせた湯呑み茶碗。

私の髪からはまだ、ぼたり、ぼたりと、雲が垂れている。

「それにしても驚いたわ。本当に娘さんだつただなんて。」

「まだ、はつきり決まった訳ではありませんけど、多分、間違いないと思います。」

頭を下げた後、私はこの親切な人から掃除道具を借り、出来る限りお墓を掃除した。

その最中にお坊さんに話しかけられたのだ。

「今私の状況はと言えば、お墓の掃除が終わって、掃除道具を返そうと、聞いておいた住所を尋ねれば、「泊つて行きなさいな」と、引き留められ、ついでつき、お風呂から上がったばかりだ。

「この人は香也乃さんの幼馴染で、良く遊んでいたらしい。」

昔の事を、色々と自分から話してくれた。

「あ、ところで吉乃さん、お家に連絡はしなくても良いの?・きっとご家族の方々も心配してらっしゃるわ。」

柱時計を見れば、確かにもう遅い時間だった。

一応、書置きを残しておいて来たとはいえ、ここは素直に提案にしたがた方が良いだろうか。

(私だったら・・・、心配するわね・・・。)

迷ったのは一瞬。

私は携帯に電源を入れ、智と利依さん、紗人さんの三人にメールを贈り、再び携帯の電源を落した。

きっと智は心配している。

だけどそのまま智の傍にいたら、私は確実に爆発し、壊れ、責めていただろう。

それだけは嫌だった。

もう傷付けないと決めたのだから。

独り善がりな愛情だと言われようが、私にはこうするしかなかつた。

一度と愛しい人を手放さない為に、私は今、ここにいる。

あの女と会話している時の智は、苦しそうだった。

利依さんは、私が智の初恋相手だと暴露してくれたけど、彼女に対する思いも少なからずあつたと思つ。

あの女は、私と一瞬目があつた時、激しい敵意を確かに向けていた。

返して貰うわよ・・・。

如何にも、智が自分のものであるかのよう。

入院する前ならば、簡単に渡していただろう。でも私は、私達二人は生まれ変わった。

目を閉じ、私は深呼吸を何度も繰り返し、長野の夜に誓つた。

決して、あの女には負けはしない。と。

、19 欠片を求めて？（後書き）

長野編、終了。

、20 ひと時の因縁？（前編や）

更新、出来ました。

、20 ひと時の団欒？

「ただいま帰りました。」

私が何食わぬ顔で娘家に帰つたのは、もうそろそろ太陽も沈もうかといつ日曜の夕方。

両手には、長野の名産品や伝統工芸品などのお土産がたくさん入った紙袋や、ギーネル袋。

と、言つのも、私はあの後、好意に甘えて宿をとらず、香也乃さんの幼馴染である人からの提案もあって、色々と昔話を聞きながら、思い出巡りをしたからだ。

最初は着替えも無いから、すぐに帰ろうと思つていた。けど、年上の人には、どうしてもと言われ、縋られては断れなかつた。

寺の墓地で出会つたあのご婦人、都筑宇子さんは、既に夫を亡くし、寂しいからと私を引き止めては、嫌々息子夫婦と同居していると愚痴をこぼし、昔のアルバムも出して、色々と話しお見せてくれた。そして、何枚かの写真も折角だからと分けてくれた。

「遅くなつて」めんなさい。はい、コレ。お土産。」

今私の顔を見たら、誰でもいつ例えるだろ？。

爽やかな五月晴れの様な輝いた笑顔

じ。

そんな顔でお土産の入った袋を、リビングのローテブルの上にドアでサツと置けば、智の顔が不快そうに歪められた。心なしか、いつもより眉間の皺も多いような気もする。

「・・・、長野に行つてたのか？」

如何にも不機嫌そうな声で問い合わせられ、少し胸が痛んだけれど、それは自分が悪いからその痛みは無視した。

（許してなんて、間違つても言えないわ。）

だから、なおさら私はいつもより笑顔を心がけた。

「『じめんなさい。急に一人で、何も言わないで出掛けりやつて、でも・・・、』

どうしても行きたかったの、と、続くはずだつた言葉は、利依さんの激しい剣幕で遮られた。

「そ、うよ！－義姉さんはいつも勝手過ぎるのよ！－あのときだつて、今回だつて。なんで一人で長野になんて行つたのよ？」

両目を潤ませた利依さんが私に詰め寄り、私の胸元の服を掴み、私を詰つた。

その利依さんの目は、寝不足なのか、泣いたせいなのか、真っ赤に染まっていた。

私はそれを見て、あえて抵抗しなかった。

詰つて気が済むのなら幾らでも詰つてもいい。
殴つて気が済むのなら、殴られてもいい。

だから、泣かないで欲しい。

(勝手よね。本当に。)

詰り、揺らし、泣く。

そんな興奮醒め止まらない利依さんを止め、諫めてくれたのは紛
人さんだった。

ただし、私も彼にはしつかりと叱られた。

「感心しませんね、奥様。少なくとも弁護人である私には、事前に
事情を説明してから行動して下さい。・・・、例の件もありますの
で。」

暗に仄めかされた事で、私は苦笑するしかなかつた。

結果が出たら、色々忙しくなる。もう少し考えてから行動し

る

「・・・、「めんなさい、本当に悪かったと思つてるわ。特に咲田
さんには色々と無理難題や、無茶して貢つてゐるから。」

そう、本当に色々と、申し訳なく思つべから。

もう一度謝罪しようと、口を開きかけた私は、右手につけている
ブレスレットを見て、思い出した。

(せうだ、あの中には・・・。)

ローテブルに置いた荷物の中から鞄を取り、古いお守り袋と小さい紙袋を出し、紳人さんに渡した。

「はい、コレ。いつものお礼。役に立つかしら?」

誰にも気づかれないようにアイコンタクトを交わし、お土産の紙袋の中身を確認させれば、紳人さんは一瞬驚いたものの、すぐにしかつりと、いつもの様に微笑んだ。

「・・・、今回だけは、この【お土産】に免じて、許して差し上げます。ですが今回だけです。仮の顔も三度までです。」

彼は、変な所で厭味だ。

私は彼に、既にもう一度の無茶ぶりを見逃し、赦してもらっている。

(ケチくさい。心狭いんだから。)

でも、それを綾橋に知られては困るので、紳人さんは言葉を選んでくれる。

それを解っているから、心ではぶつぶつ言いながらも、私は頭を下げる。

「恩に着ます。ありがとうございます。」

頭を深々と下げる私を、満足げに見た紳人さんは、私が渡したモ

ノを鞄にしつかりと入れ、利依さんが淹れた紅茶を飲むため、ソファに腰掛けた。勿論、さりげなく利依さんの隣に。

(ほんつと、解りやすいんだか、難いんだか。)

それを見て、笑いそうになるのを誤魔化すため、いまだ不機嫌そ
うにしている智の胸に抱きついた。

するとどうだろ？

抱き着いて初めて解った心の充足感。
離れていた間、何となく物足りなかつた感覚。

(ああ。 そつなんだ。)

すとん、と、心がひどく簡単に、それだけで納得した。

それは唯一の伴侶だと、自分の心に、居るか居ないか解らない神
様に誓つた愛しい人の温もりが、近くになかつたから。

その満たされた感覚の中で、私は穏やかな口調で、智に抱き着い
たまま謝罪した。

、20 ひじきの因縁？（後編）

本譜ナではなこので、レリで凶呂つまむ。

、21 ひと時の因縁？（前書き）

何かもう、サブタイトルが思い浮かばないんですけど・・・。

、21 ひと時の団欒？

「この人の温もつさえあれば、生きていいかと思つたのは、いつからだつただろうか。

「「めんなさい、どうしても私一人で行きたかったから。今はまだ詳しく述べられないけど、私のご先祖様に報告とお礼の挨拶してきたの。」

（私も結局は女なのね。）

狡猾で、卑怯で、計算して。そんな所をよく動物の狐に例えられる女性。自分だけはそくならないように心掛けていたのに、結局はアツサリとその手段を取ってしまった。

縋るような口調と眼差しは結婚するまでの23年間で培ってきたものだから、私本人でさえ見抜けない、限りなく本物に近い偽物。

本当に私が助けて欲しい時は、誰も気づいてはくれないし、誰も私の周りにはいない。

だから私は他人に期待しないようにずっと生きてきた。なのに。

（期待してたの？）

「この最近の微温湯の様な生活を送っていた私は、いつもなら背中にすぐに智の両腕が回るのに、今回はそれがなかつた、と悲しく思ひ、それがまた、私自身を卑屈にさせ、弱くさせる。

(身勝手なくせに、赦してもらおうなんて思つてなんてなかつたの
に。)

私と智の間に流れた沈黙は、――・――ケ円の中では、一番長かつたと思ひ。

そのせいが、私は無意識に抱きつこうとした智から離れ、後ろに一步後退し、顔を俯けていた。

まるで、以前のように冷え切つた関係に戻つてしまふのではない
かと、思つてしまふくらいの冷たい空氣と沈黙。

その異様な緊張感を孕んだ状況を、呆気なく打破してくれたのは、

いつでも無邪氣で悪氣のない、小さな天使のあやめちゃんだった。

「おねえちゃん、なくひつようなんてないよ。おねえちゃんはわる
くないし、おにこひやんは、おねえちゃんにおいていかれてすねて
るだけだもん。」

私の身体にぴとっと張り付いてきたあやめちゃんの体温に勇氣づ
けられ、私は心こうじやくして智の顔を窺い見た。

智の表情は、いつもまして無表情に近く、それでも眉間の皺は
常より深く刻み込まれ、瞳には不満げな色が浮かんでいた。

わざと、――は結局許してくれるだろ?智、ありがとうと本来
なら言つべさを処なのだろ?けど、智は視線を合わせてくれない。

これがおそらへば、智が、私が勝手な真似をしたことに対する
報復と仕返し。

(なら、私もその空気につつままで。)

私は智の顔から視線を離し、私に抱きついたあやめちゃんの頭に手を乗せ、その頭を優しく、でも、少しだけ拗ねたように撫で、よつ、と、力を込め抱きあげた。

「あやめちゃん、今田は一緒に寝てくれる？お姉ちゃん、一人だと寒くて寝れないの。」

あやめちゃんがどびつきりの笑顔を浮かべた時、私はあやめちゃんの体温で癒されていた。

あやめちゃんだけではないだろうけど、特に小さな子供の温もりは、私を慰め、癒し、勇気づけてくれて、幸せにしてくれる。

だから、本音が言葉として、無意識にでも出ていたのだと想つ。

「私もあやめちゃんみたいな可愛い女の子が欲しかったな。」

その、諦めにも似た弱々しい咳きは、眞にも聞こえていたのだと思つ。なかでも、あやめちゃんは弱々しくも、近くにいたことで、よりダイレクトに聞こえていたと思つ。

私が独自に病気の事を調べているのは、弁護士の紳人さんしか知らない事で、その紳人さんは、常に私の行動に協力的で、時には助言したり、私がしたミスもフォローもしてくれる。

現に、今もざわりと、異様な雰囲気と荒れた空気になりそなうところを、自然を装い、上手い言葉で私を援護してくれた。

「産めばいいのでは？まだ若いのですから、幾らでも産めるでしょうに。世間には40歳を超えて出産する事も珍しくなくなつてきてるんですから。なんなら、産み分けの方法でも調べてみては如何ですか？」

不用意に、言葉を漏らすな。

鋭くも、冷たい紳人さんの眼光に、気押されないよう、「ぐくりと、口の中に溜った唾を飲み込み、引き攣りそうになりながらも、笑顔を崩さず、恥じらいを装いつつ、頷いた。

「そ、そうよね。時間があつたら調べてみよつかしら。昔から子供は、一姫二太郎、が良いつて言われてるものね。」

あははは、うふふふ。

一人して能天氣を装い、笑いあえるのは、弁護人と依頼主と言つだけの信頼関係だけではなく、年齢的要素もあると思つ。

その証拠に、私と紳人さんの携帯のストラップや、携帯の機種まで一緒だつたりする。

但し、これは全くの偶然。

結局、私と紳人さんの、本音を隠すための冗談混じりの応戦は、途中食事も挟み、家族そつち抜けで交わされ、それが終わつたのは夜の十時を過ぎた頃。

「では奥様、また後日挨拶に伺います。 利依さん、奥様の事を宜しくお願ひします。」

「いちいち言われなくても、義姉さんの事はアタシと兄さんが守るわよ……」

いつもより殺氣立つて応戦する利依さんに、紗人さんは軽く瞪目し、そして私に苦笑を向けた。

「どうやら我らが綾橋のプリンセスは、ご機嫌斜めの様ですね。」

「まあ、我らがプリンセスだなんて。そう思ってるんでしたら、一刻も速く事務所の一つや一つを開いて、ここまで上ってらっしゃいでなければ、どうぞの蛮族に横から盗られてしまいましてよ。頼りになるナイト様？」

「…………。」

（勝ったわ！）

私のせいできれいが出来ない、遅れているのだといつ、その非常に恨めし気な睨む紗人さんを、利依さんと（これは私がわざと仕組んだ。）、あやめちゃんのお母さんで、紗人さんの姉・咲田侑里音さん（さきた ゆうりおん）さんに玄関まで送らせた。

「青春ねえ。若いつていいわねえ。利依さん、いつになつたら気付くのかしら？」

「ヤーヤーと、いつもよつ楽しげに悪びく笑う私を、智は不愉快そうに私を見ていた。

実際、私はいつもより大分楽しかった。

何せ、今日私が初めて言い負かした紺さんは、滅多にそのクールな表情を崩さない、【法曹界の貴公子】と渾名され、色々な感情を向けられている人なのだから。

その彼を、私が言い負かした。

（これで喜ばない人はきっと詐欺よ。詐欺。）

ふふふ、と、明るく、悦に入っているように笑えるのは、きっと、あの二人を見ているからだろう。

あの二人を見ていると、自然と某猫と鼠の、会話のないアニメを思い出し、笑ってしまえるほど、気分が明るくなる。

さぞかしあの二人が結婚し、子供でも産まれたらば騒々しいだろう。意外と、彼は焼き餅妬きだから。

（そうなつたら、垂涎モノの見ものだわね。）

にやりと、悪魔の笑いを浮かべ、によきっと、悪魔の尻尾を生えさせた時（気分的に）、智のその声が聞こえた。

「随分と機嫌が良さそうだな。そんなにアイツが好きか？」

智の的外れな問い質しも気にならないほど、私はあの二人が大好きで堪らない。

「うふふふ。あの紺さんの悔しそうな顔、見ものだつたわ。人の恋つて、素晴らしいわね、智。」

「吉乃、答えになつてない・・・てつ、まさか？」

私の顔を再度見て、智は自分の顔をその大きな手で覆い、大きな溜息を吐いて、苦笑に近い笑みを浮かべた。

「まさか、あの利依が、あの紺人にな・・・。アイツは昔から紺人には、常に歯向かつてはいたが、まさかそれが・・・」

それが好意の裏返しだと思わなかつたのも、考えなかつたのも、智らしいと思う。

先が思い遣られると、深く溜め息をついた智は、ソファーに座りなおし、グラスに注いであつたミネラルウォーターを一気に飲み干した。

智は余程驚き、困惑したのか、立て続けに水を飲み干した。

「そんなんに驚く事かしら？私にはあの二人が、結構お似合いだと思うんだけど。」

智が驚くほど、私は驚かなかつた。

一人が従兄妹だという前に、私には、最初から互に恋しあう男女にしか見えなかつた。

一人は立派な成人なのだから、私や周りの人間が心配しなくとも、結婚しようと思つなら結婚できる。

出来る事なら、一人が結婚し、子供が生まれるまでは生きていた

い。

でも。

思い出すのは、退院が近付いたある日の、あの日、あの時、田にし、耳にした言葉。

幾ら名医だと言われてはいても、私を蝕んでいた病魔は、悪性のモノ。

先生は再発の可能性が低くなると言つただけで、再発は絶対しないと、誰も言つていなし、断言もしていない。

智や家族達は優しすぎる。

その優しさすぎる智達の心を守るため、私は知らない振りをしその時まで貫き通す。

私は偶然話を聞いてしまった日に、それを誓い、その翌日に、先生達には、絶対に私以外の他の人にはこの事を言わないように、必死に頼み込んだ。

私の必死さを理解してくれたのか、先生達は渋々頷いてくれた。

『奥様、この事は・・・』

『判つてるわ。私達は何も見なかつた、聞かなかつた。茨姫の様に、時が来るまで目を瞑り、耳を閉ざし、その時まで、健康な【綾橋吉乃】を演じて、その日を迎えるの。だから、お願ひ・・・』

誰にも言わないで、と、私は頭を下げる。

私の隣には、紗人さんがいた。

その時の紗人さんは、私のその言動を黙殺し、誰にも言わなかつた。

彼は、本氣で人の嫌がる事は決してしない。
だからこそ、彼を弁護人に選んだ。

過去の日を思い出し、沈みこんでいた私を正気にさせたのは、私を包む柑橘系のパルファンの香りと、その声だった。

「何を考えてる・・・、吉乃」

（バカ！…どうして今思い出すのよ…）

自分で自分が許せない。そんな思いを抱えつつ、私は微笑んだ。

「・・・も、勿論、それは利依さんのドレス姿よ？あれだけ胸があるなら、ドレスは選びたい放題ね。羨ましいわ。」

反応が遅れ、私が言葉に躊躇いたのは、智には気付かなかつたと思う。

何故なら、私が自分の薄い胸を自分で触り、残念そうに溜息を吐いた私を、智は何も言わずに目を逸らしたから。

私はだから残酷な嘘をつき続け、真実を隠し、闇に覆い隠し通す。

総ては、私を愛して、心配してくれている人達の為よ。と、自分に言い聞かせながら。

暗に神は私に告げたのだろう。

己の身に降りかかった試練に耐え、乗り越えて見せろ。

と。

この時の事を、私が幸福感に包まれ、笑いながら「私の人生は、茨の道の様だったわ」と、言つ事を、この時の私は思いもしていなかつた。

、21 ひと時の因縁？（後編）

次から3章ですよ。
3章は短いです。

、22 製來？（前書き）

お氣に入り登録、ありがとうございます。

どうして幸せは長続きしないのだろう。

職場に何事もなかつたかのように復帰し、今日でなんだかんだで
10日目。

私は以前より遙かに仕事に追われ、忙しく日常を過
ごしていた。

私が何事もなく復職出来たのは、会長である綾橋のお義父様と、
利依さんのお陰。

二人は、私が休んだのは病気療養であり、また、疲労の為の休養
であると文章に認め、辞表を受理せず、破棄していた。

それに対し、多少のこじつけはあつたものの、今、私が所属して
いる総務課部の人達は、快く迎え入れてくれただけではなく、色々
と私を頼ってくれた。

年明けには主任になるようになると、内示を受けている。

「菜々富くん、あの資料は何処にやつたかな？」

そう言つて、自分の机の上を探し、頭をグシャグシャに搔いてい
るのは、課長代理の鳥居とりい 美鈴さん、38歳、男性。

私はパソコン画面から視線を離さずに、鳥居さんが捗していくそ
な資料を頭の中で検索し、それらのありかを伝えた。

「マーケティング部の資料でしたり、今作り直しています。常務の
インタビュー関連でしたら、課長のデスクの上にある赤いファイル
に綴じてあります。」

「ああ、あつた、あつた。これが。」

助かった、と、のほほんとした笑みを浮かべながら、高速でイン
タビューア記事の文章を、パソコン画面に立ち上げていく鳥居さん。
(こんなに忙しかったかしら?)

総務部は比較的楽な部署だった記憶がある。

それなのに、こぞ私が仕事に復帰してみれば、私を待ち構えてい
たのは、同僚達の涙ながらの愚痴と文句、そして、天につく程まで
に山積した色々なデータや、書類の山。

涙ながらに詰られ、心配され、頼られ、詰め寄られ。

私が配属されている部署は、普段は暇で、退屈で、地味な総務部。
それなのにどうしてだろうかと思えば・・・。

「もうすぐボーナスの時期ですねえ。」

と、相変わらずのほほんとした鳥居課長代理の声。

そう、ウチの会社はもうすぐボーナスが支払われる。

去年までは私はそれに全く関与していなかった。

それが今年は、課長の長期出張に伴い、私や他の人達にそれらの業務が降りかかるつてきた。

(課長つて、実は凄かったのね・・・。)

三日前から出張に行つた野島課長。

いつもどこかふわふわして、掴み所のない課長。その人がいないだけで、こんなにも忙しい。

と、そんな所に。

「お疲れ様でえ～す センパイ、お仕事の復帰、おめでとうございまーすvvv」

(う、疲れる、本当に疲れる。)

マンガみたいに、語尾にハートマークを飛ばしているんじゃないと思われるテンションで、声を掛けてきたこの奇特な女の子の後輩は、堂々と玉の輿婚を宣言し、あまつやえ、自分にとつての恋愛とは、自分を作るステータスの一つだと断言し、唯我独尊・自分至上主義の旗を大きく掲げ、いつも違う男性社員と一緒にいる。

「七海い、頑張ったンですよ～？センパイが休んでた間に、社内報、2本も書いちやいましたあ～。」

ぶりぶりの、その超ぶりっこな口調と、甘え、媚びた様な声の彼

女・千代田 七海、20歳は、今年の春、女子短大を卒業し、新規採用された社員だ。

「」の彼女の見かけや言動に反し、実際の彼女は生真面目で、そして強がりの寂しがり屋だ。

それを知らない一部の女子社員から、謂れのない非常に陰湿で、心ない虐めを受けている事も、誰にも言わずにはすら耐えている。

パソコンのキーボードを、朝から休み無くカタカタと弾いていた私は、彼女の言葉を聞いて、顔を上げて微笑を浮かべた。

「やつ、貴女もやれば出来るじやない。良くなかったわね、千代田さん

」

私は普通に微笑んで、彼女を勞つただけのつもりだった。なのに、その途端、何故か彼女は頬を赤らめ、もじもじとし始めた。

（な、何？）

「」は照れるような所ではないし、照れるような事も言つた覚えも、した覚えもない。

私が困惑し、千代田さんを見ていると、それらを見ていた他の社員は、あからさまな溜息を深々と吐き、呆れ果てた顔をした。

、
22 製來？（後書き）

うん、長いし、肩も痛いので、今日はいいままで。

、23 製來？（前書也）

遅れですみません。

無知と無自覚は同罪だと言っていたのは、誰だつただろ？

滑らかで、透明感のある頬を愛らしく赤く染め、もじもじしながら私を見つめる後輩と、そんな後輩を、困惑した面持ちで見つめ返す私を、なんと言つていいか判らないと苦笑し、嘆息する同僚や上司達。

私は更に、その雰囲気に一人でイライラした。

(一体、何なのよ。私が何かしたつていうの？)

ただでさえ仕事に復帰したてで、その上、輪を掛けたように忙しい時だというのに、無駄な時間は取られくなかった。

そんな私の機嫌を読み取ったかのように、その基となつた後輩が口を開いた。

「社長が先輩にベタ惚れなのも、七海、今なら、すっごく頷けます
う～vvv」

七海いへ、偶然観ちゃつたんですよー。センパイ、昨日社長室で社長とスッゴいキスしてましたよね～？あれって、あのアトだつたんですか？先輩の服、乱れてたしい～。

その口をすぐに覆つてやりたかつた。

でも、その悪氣なくきやぴきやぴはしゃいでいる彼女を、私が止めようとしたのなら、それはそつですと、自ら肯定するよつな事だから出来ない。

事実、私は昨日の昼休み智から社長室に呼ばれ、一応勤務中だといつのに、決して口に出して話せない行為は、断り、拒みきれずに流れされ、してしまった記憶はある。

（死んだってそれは認められないわ！－第一、恥ずかしいじゃない！－）

それに、社長である智と私は結婚している事実を隠している。なのに、どうして・・・。

「せんぱーい、社長さんほんと風なんですかあ～？参考に七海にだけ教えて下や～い。」

「千代田さん……」

「仕事に戻りなさい！－」と、続くはずだった私の言葉尻を、彼女はさっと遮り、にこおーつ、と微笑んで、爆弾を放り投げてきた。

「あ～、センパイ、もしかして照れてるんですかあ～？赤くなっちゃって、可愛いですう～」

（くつ、なんなのー？なに言つても無駄じやない。論破されちやうわ。）

彼女には、口で勝てない。

私はその時既に、無意識に彼女に白旗を掲げていたのかもしれない。だから口がつい滑ってしまったに違いない。

「さつと社長さんなり、二回は平氣でやつちやうそうですよねえー。

」

(二回?)

「三回で済めば良い方よ・・・。」

そう。二回で終わればね・・・?

と、つい小さな声で零してしまった本音。

その本音は、本当に、小さくて小さくて、皆に聞こえるはず様な声量ではなかった。なのに、そんな私の声を、その場にいた人達は聞き耳を立てていて、結果、暫く部署内は会話に花が咲いた。

その会話の内容は、勿論、カップルや夫婦間の夜の事情やら、出会いなど多岐に渡る。

もはや、暴露大会に近いかもしね。

出会いはいつ、何処でだとか、週に何回会ってるか、だの。

きっと、少し前の私だったら、そんな日常生活の、しかもそんな濃い恋愛トークには参加しなかつただろう。

だから、なおさら盛り上がったのかもしれない。
彼らにも、悪意はない。

「やつ言えば社長と言えば、ついにやつさ、結構な（化粧の濃い）美女と腕を組んで歩いてたぜ？（嫌々に見えたけど）」

「俺はキスしてるとこを見た。（その後、直ぐに恥々しそうに拭つてたけどな。）」

「あつ、俺は子供どりの所を見た……（複雑そうな顔で）」

彼らは顔を見合させ、コレって浮気になるのかな？と、ちょっと騒ぎ、私の様子を窺つてきた。

私はそんな彼らに、内心とは程遠い笑みを浮かべて見せた。

腹は立たないのかと問われれば、それはすぐに『ノー』と言える。けど。

お腹を撫で、思つて、考へてしまつたのは。

私には『えられてあげられない、『家族』という温もりや、穏やかさ、幸せを、あの人なら、あの女なら、智にて『えられてあげられる。

ぐつ、と、突然競り上がつてきた、苛立ちと吐き気を何とかして抑えようとした時、千代田さんがそんな私の体調の変化に気付いた。

「センパイ！？大丈夫ですか？顔色真つ青じやないですか！－！誰か、救急車！－！」

千代田さんの声は聞こえたけど、私は直ぐには返事が出来なかつた。

、
23 製來？（後書き）

短くて済みません。後日、更新します。

、
24
襲來？（前書き）

更新、
更新。

ぐねぐねと回る世界に、視界。
モヤモヤとする聴覚。

感じられるのは、立つてられなこへりこの眩暈と、気持ち悪さと、自分の不甲斐ない身体へ対する嫌悪感。

そのあまりにも酷い眩暈に立つてられなくなつた私は、傍で私の身体を支えていてくれていた千代田さんに凭れ掛るようにして、姿勢を崩した。

(ああ、やつぱつ・・・。)

悲しいけれど、私の病状は良くなる処か、悪化の道を歩んでいる
としか思えない。

なのに、どんどん冷えていく身体に反し、身体の内側は必死に生きようと熱くなる。

苦しい呼吸に、乱れる鼓動。

「センパイっ！…菜々富センパイ、大丈夫ですか？しつかりして下さい。誰か、社長を呼んでつ…！」

いつものぶりぶりの甘え、媚びつた千代田さんは正反対の様子に、私がいた部屋は、一気に騒然となつた。

そんな中、私はと言えば、身体は苦しい、助けてと訴えてくるのに、頭と理性は急速に冷静になりつつあった。

そう、それはきっと、彼女が見えたから。

虚ろになりつつある意識を、強引に覚醒させ、ぐるぐると回る視界を定め、顔を上げる。

そして、目に飛び込んできたのは。

艶々とした髪が綺麗にセットされ、大きく咲いた薔薇を思わせるかのような笑みに、男性ならば、その完璧で妖艶な肢体を抱きたいと思わせる、かつての智の恋人と思われる、あの女。

「あら、何か言いたそうねえー？」

私の刺すような視線を感じ取ったのか、それとも最初から私をバカにしに来たのか、あの女は、当然の様に「返して貰うわよ。」と笑つた。

気持ち悪くて、気持ち悪くて、何も言えない私を、あの女は、侮蔑と蔑みの含んだ眼差しで、毒を放ってきた。

「貴女、そんな身体で綾橋の跡取りなんて産めるの？私、知ってるのよ？貴女が子供を産めないの。だから、私が代わりに産んであげる。あなたは所詮、私の代わりだたんだから。」

「シン、シン。

私の方へ、確実に近寄つてくるヒールの音。

そしてついに、その足音は私の手を踏むといつ暴挙で止められた。

手の甲に走る痛烈な痛みに、顔が歪む。

(どうしてこんな人が・・・。)

人を人とも認めない、人を蔑む事しか知らない冷たい瞳の女、城花 万季。

そんな女と、どうして智は交際していたのだ？

(私しか好きじゃないって、言ひてたじゃないつつーー。)

ドロドロと、私の中でどぐろを巻き始める黒い靄。それを助長させているのは、いつもそりと私が調べて、得た情報。

城花 万季と、綾橋 智の間には、一人の児女が産れている。

・・・

誰も知らないし、智だって知らない秘された事実。

それを私に教えてくれたのは、あの女と付き合いがあると言つた女性。

彼女は、興信所の前で、右往左往していた私を見かけ、声を掛け、話を聞いてくれた。

とても、あの女とは縁がなさそうな人だった。

私が無反応だったことに腹を立てたのか、彼女は私の髪を鷲掴み、無理矢理顔を上げさせ、私を侮辱した。

「ふん、智つたら、何処が良かつたのかしら。こんな子供みたいな貪相な女」

合せられた視線に、私は驚いた。

彼女には人としての、他者へ対する、情愛や慈しみの感情が欠片もみられなかつた。

その酷な事実に、あの悪夢の様な日の事をゆっくりと思い出してみる。

そんな私の傍で、千代田さんが私の代わりにあの女に必死に応戦していくくれていた事を、私は後に知つた。

あの女、万季が連れていった女の子は、4歳児にしては、その年齢にそぐわぬ、随分と小さい身体付きだつた。

もしかしたら、彼女は子どもを愛せないのかもしれない。そればかりか、智の大切な家族も。

その思いが私の中で生れた時、私が思い、感じたのは。

【あなた、本当に諦められるの?】

(だつて、私じゃ智の子供を産んであげられない。)

【 こんな女に、渡しても良いつて、本当に困ってるの?】

(だつて、そうするしか・・・。綾橋の為には・・・。)

【 綾橋の為?笑わせないで。あなたは怖くて逃げてるだけ。彼に嫌われるのが怖くて逃げてるだけなのよ。】

(そうよ、それがいけない事だつて言つの!?)

声なき声は、私の中で高らかに笑い、そしてその真っ赤な唇を吊り上げ、私に歌い掛けるように私の耳元で囁いた。

【 盗りれるわよ?今度こそ、永遠に。それで本当に良いの?吉乃。】

名前を呼ばれた様な気がして、乱れて苦しい呼吸を何とか整えていた私は、その声がする方へ目を向けた。

そこには、他の人からしてみれば、何もない空間にしか見えなかつた。

けど。

私には、どうとした、得体の知れない、不気味で黒い靄に包まれたもう一人の私がいて、いるように見えていて、そのもう一人の私は、脚を優雅に組み、蠱惑的な笑みを浮かべ、暗い闇を背負い、椅子に座っているかのような姿勢で、ふわふわと浮かんでいた。

もう一人の私は、私を憐れむのではなく、私が無意識の内に避け、逃げていた本音を、容赦なく私に突き付けてくる。

【恐いのよね？また棄てられるのが。菜々宮の家みたいに利用されただけ利用され、捨てられるのが。でも、今戦わなかつたら、またあなたは逃げて、戦わないのよ。今戦わないで、いつ戦うのよ。貴わざはいつも逃げてるだけだつた。やつと、幸せになる為に巡り逢えた人なのに。貴女は自分の精神^{ココロ}を守る為だけに、その人を捨てようとしているのよ。】

それでも本当に諦めきれるのなら、離婚するのね。

そう呟くと、もう一人の私は泡のように弾けて、それと同時に黒い靄も消え失せていた。

、24 製來？（後書き）

やばい、終わらない。

1月まで移転できるんだろうか。

頑張れ、自分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9895x/>

Si je tombe dans l'amour avec vous

2011年11月25日20時58分発行